釧路短期大学 幼児教育学科

実　践　報　告

第 6 号

2025（令和 7）年 3 月 26 日発行

目次

<授業実践>

K 町におけるペアレント・トレーニング講座の効果とこれからの課題

小林麻如…　1

日本の幼稚園教育とアメリカ・テネシー州の Kindergarten 教育の比較研究
　―それぞれの教育要領から―

篠木真紀…　8

「より良い人間関係」を構築する上で強化したいビリーフやスキル

高畠昌之… 17

愛着障害やパーソナリティ障害についての考察

高畠昌之… 25

<事業報告>

釧路市輝くまちづくり交付金採択事業を継続して
「幼い子どもたちのためのコンサートひろば」の実践②
　―「0 歳からのファミリーコンサート」の試み～豊かな感性の育ちを求めて―

進藤信子…33

KJC ランドチーム保育の試み
　―１・２年生連携の視点から―

篠木真紀…41

K町におけるペアレント・トレーニング講座の効果とこれからの課題

小林　麻如
（釧路短期大学幼児教育学科）

１．はじめに

厚生労働省では、ペアレント・トレーニング（以下，PT）について、環境調整や子どもへの肯定的な働きかけを学び、保護者や養育者の関わり方や心理的なストレスの改善、子どもの適切な行動の促進と不適切な行動の改善を目的としたプログラムと定義されている[1)]。

また具体的には、ペアレント・トレーニング行動理論を理論的背景としてプログラムが構成されており、行動の理解、ほめ方、環境調整、不適切な行動への対応などについて保護者が学び、グループワークやホームワークを通して実践をするものとしている[2)]。

K 町担当職員によると、次の通りであった。

今回 K 町では「子ども子育て支援法」に基づいた「K 町こども子育て支援事業計画」の基本理念に基づき、子ども・子育て支援事業の一環として PT を実施するに至った経緯がある。加えて、R5 年度に係が新設された当初、短期間での一時保護を複数回繰り返しているケースが複数あった。児童相談所との面談や訪問に同行するうちに、保護者がこどもへの声かけ、かかわりを工夫することで、一時保護を繰り返さなくて済むのではないかと考えた。また、その他の親子にとっても、こどもとのかかわりを学ぶ場所があれば、よいかかわり方が少しずつ広まり、児童虐待防止につながっていくのではないかと考えた結果 PT を開催する理由としている。

これを受け、筆者が開催した PT の参加者に行ったアンケート結果から考えられる効果とこれからの課題について明らかにしていくことを目的としている。

２．対象者

広報については、同町のホームページや広報紙を通じて参加者を募集した。この他、町内にある小学校 5 校に通う 1～2 年生及び社会福祉法人が運営する児童発達支援センター、1.6 健診及び 3 歳児健診時にフライヤーを配布した。

広報内容としては、PT の説明、開催日時、場所、託児があることを記した。この他、参加条件として子育てをしている子どもの年齢として 4 歳から小学校 2 年生を記した。その結果、参加者は、夫婦 3 組、母親のみの参加が２名の計８名となった。この中で医学的な診断がついている子どもは２名であった。子どもの状態像としては、好きなもの以外食べない、切り替えが難しい、分離不安など行動上の問題を示すものが多かった。参加した保護者の子どもの状態像については表１に示す。

表１　子どもの年齢および状態像

	年齢	子どもの気になる状態
1	3歳10か月	おむつ使用、歯磨きを嫌がる、食事（好きなもの以外食べない）、指しゃぶりがとれない、おやつねだり
2	4歳11か月	タブレットがなかなか手離せられない、睡眠時間、登園拒否（分離不安）、言葉がうまくしゃべれない、発達が遅れている、
3	5歳11か月	マイペース、指示待ち、何事にも時間がかかる、切り替えが苦手、声掛けにも反抗、あまのじゃく
4	6歳	トイレトレーニングが進まない、切り替えが難しい
5	8歳	ふてくされること、学校に入れなかったり、母と離れられなくなること

３．プログラムの内容

PT では、中田(2010)が、短縮版プログラムによるペアレントトレーニングは、参加者の子どもの 障害から生じるストレスと精神的負担感や家庭での困難さが明らかに軽減でき、短縮版プログラムが参加者の精神的状態を改善する点において有効であることが認められた[3]。より少ない回数で効果的なプログラム構成を工夫する必要があることが指摘されていることから今回の PT プログラムには、中田(2023)を基本に、全６回の集団プログラムを活用し実施した。プログラム内容[4]については表 2 に示す。

表 2　プログラムの概要

回	内　容
1「大切なことは3つ」	・自己紹介 ・講義：子どもの行動の理解と分類 ・グループワーク：子どもの行動を３つに分類する ・ホームワーク：２週間の子どもの行動観察と好ましい行動の抽出の実践
2「ほめることを習慣にしよう」	・グループワーク：ホームワークの振り返り ・講義：肯定的な注目の与え方 ・ホームワーク：子どもの好ましい行動に対して肯定的な注目を与える実践
3「小さなよい変化をみつけよう」	・グループワーク：ホームワークの振り返り ・講義：否定的な注目の理解と計画的な無視 ・ホームワーク：子どもの好ましい行動に対して肯定的な注目を与える実践
4「指示を上手に与えよう」	・グループワーク：ホームワークの振り返り ・講義：CCQ ・ホームワーク：CCQ を使った指示
5「上手な手助けを工夫しよう」	・グループワーク：ホームワークの振り返り ・講義：子どもの行動特徴に合わせた手助けを考える ・上手な手助け
6「まとめと振り返り」	・グループワーク：ホームワークの振り返り ・講義：復習 ・全体で感想や質問 ・修了式

４．実施状況

（１）参加者の状況

今回実施したPTには、8名の保護者が参加し、そのうち、両親での参加は3組となった。この他、参加者の中には、夫婦間で講座内容を共有できる体制を作ることを希望し、一方の都合がつかない場合でも、必ずどちらかが出席する形をとっていた。

（２）ホームワークの振り返り

保護者が家庭で実践したホームワークの報告を行う。この時、筆者は保護者に対して取り組みをねぎらい、子どもへの関わり方や視点の変化など素晴らしいところを見つけ、肯定的なフィードバックを行った。

（３）講義

各回の講義内容を資料として配布し、加えてパワーポイントで映し出しながら説明を行った。また、講義内容から各家庭での子どもの言動を想像しながらワークシートに記入し、話し合いを行った。また、ロールプレイを2人1組で行い、お互いに子ども役・保護者役を交代して行った。この体験を通して、気が付いたことを発言し合ったり、良かったところを見つけ合った。

（４）ホームワークの説明

2週間後に行われる講座までの間に家庭で実践してくる内容について説明を行った。ホームワークの記録用紙は毎回の講座終了時に配布し、説明を行った。

５．各回のアンケート結果

参加者へのアンケートは2種類実施しており、1つは厚生労働省ペアレント・トレーニング支援者用マニュアルに掲載されている毎回アンケート[5)]を実施した。アンケートの回答方法は、各講座の終了時にアンケート用紙を配布しそれぞれの項目について「まったく思わない」を1、「あまり思わない」を2、「少しそう思う」を3、「とてもそう思う」を4とし、評価する。6回分のアンケート結果は、表4に示す。

2つ目のアンケートは、講座修了時にPTで行った学習スタイルや感想などについて記述式で実施した。学習スタイルについての評価の回答方法は、それぞれの項目について「とても役に立った」を3、「役に立った」を2、「そう思わない」を1とし評価し、平均値で表している（表5）に示す。回答に要した時間は、10分程度であった。なお、アンケートを実施する際、倫理的配慮として研究目的、方法、アンケートへの回答は自由意志で拒否による不利益はないこと及び個人情報の保護について、口頭で説明を行い、同意を得ている。

表 3　ペアトレトレーニング実施に関するアンケート結果（6 回分）

開催日（参加人数） / 質問内容	10/11	10/26	11/2	11/16	11/30	12/14
	⑻	⑸	⑻	⑺	⑸	⑹
講義はわかりやすかった	4	4	4	4	3.8	4
テキストは使いやすかった	3.9	4	3.9	3.9	3.6	3.8
ワークシートは使いやすかった	3.8	3.8	3.8	4	3.8	3.7
グループでの話し合いはこれからの子育ての参考になった	3.8	3.8	4	3.9	4	4
今日習ったことは、家庭でもできそうだ	3.6	4	3.8	3.9	3.2	4
子どもへの対応に自信がついた	3	3	3.2	3	3	3
今日の内容に満足している	3.8	4	4	4	3.8	4

6 回分のペアトレトレーニング実施に関するアンケート結果の回答から「講義の分かりやすさ」と「内容の満足」については、参加者から評価されている。しかし、「子どもへの対応に自信がついた」かについては、平均 3.0 であったことから保護者は、子どもとの関わりの中で起きる言動を理解し、そこで必要となる関わりをその都度実践する難しさが考えられる。

表 4　ペアレント・トレーニングの学習スタイルで役立った項目

	平均値
講義	3
ロールプレイ	2.7
ホームワーク	2.8
ホームワークの振り返り	2.8

講義をはじめロールプレイ、ホームワークでは、PT で基本となる子どもの発達や特性など理解しやすくなるよう参加者から出される子どもの様子を取り入れながら進めてきた。そのため、参加者 1 人ひとりがイメージしながら取り組めたのではないかと考えられる。

表 5　ペアレント・トレーニング受講時、子育てについての悩みを話すことができたか

・主に妻が代弁するかたちでしたが、話しやすい雰囲気を作っていただいたので
・ある程度今まさに困っていることなど先生や他の保護者さんのお話を参考にさせていただきながら今後取り組んでいこうかなと思いました
・悩みを深く先生が理解してくれるので、ありがたかったです
・普段の生活で感じている悩みを話すことで解決につなげることができた。もしくは解決に向けた気づきを得ることができた
・先生が個別に話を講義後に聞いて下さったため

PT を開催するにあたり、筆者は、参加者がうまくできたこともうまくできなかったこと

も含め話しやすい雰囲気作りを心掛け、参加者同士が認め合い、孤立しない環境整備を行ったことが、結果として参加者一人ひとりが話をしやすい場になったと考えられる。

この他、PT の講座時間外に個別の相談対応を行い、できるだけ参加者の不安の軽減や子育てに自信が持てるような時間があったことも効果があったと考えられる。

表 6　ペアレント・トレーニングの中で参加者からの意見で参考になった意見はあったか

- 片付けのための環境整備
- 同じ年代のお子さんが多くて、ほとんどあるある！と賛同していました。全て参考になりました
- ホームワークの振り返りなどで、このご家庭では、こうしたことに気をつけて（ほめるタイミングなど、ほめ方など）子育てされているんだなと思いました

参加者が悩みとして挙げられたテーマについて他の参加者が意見を述べる時間を作ることで具体的な解決方法やこれまで考えつかなかった話を聞くことができたと考えられる。また、参加者から出される悩みが、他の参加者も同様に悩んでいる事柄である場合が多く共有または共感できる時間になったと考えられる。

表 7　ペアレント・トレーニングに参加をして、育児に対して考え方に変化はあったか

- 参加する前はいかにしてこちらの希望どおりに行動させられるか考えていたが、ほめることで子どもの行動を改善できると気付けた。また、ほめ方についても何か達成できないとほめられないと考え、ほめるところがないとしてきたが、できていることをほめていいとわかった。
- あたりまえの行動をほめるというようなことは大人になった今では思いつかなかったので参考になりました。
- もう〇歳だから〇〇できないと！やらないと！あせりを一度捨てて、子の成長レベル、段階を優先、楽しむことを増やす、選ぶ
- ただほめるだけではなく、その行動をほめるようにしようと思った。子どもの気持ちになってみようと思うようになった。
- 育児はむつかしく、親は学び続けないといけないということに気づくことができた。
- 「ほめる」というのがいかに大事か分かりました。夫婦で参加したというのは大きかったです。

参加者全員が､PT に参加する前と後で育児に対しての考え方に変化があったとしている。

これは、講義、ロールプレイ、家庭での実践を通し、子どもの行動が変化していくことを実感できたと考えられる。更に、親が子どもの状態に合わせたほめ方や指示などの具体的な養育スキルの獲得や環境調整などを行ったことで子どもの行動の意味を理解し、状況に応じた関わりができるようになったとも考えられる。

６．まとめ

K 町で実施した PT は、2016 年に改正された発達障害支援法では「家族なども含めた、きめ細かな支援」「地域の身近な場所で受けられる支援」として、児童発達支援ガイドライン（厚生労働省,2017）では、家族支援プログラムとして位置付けされると考える。

加えて、子ども一人一人が育つ家庭環境の変化は、子どもの育ちに大きな影響を与えると考えられることからも、行政が主体となり地域の保護者へ学びの場が提供されたことは有

意義な機会となった。

PTの参加者に行ったアンケート調査から集団でのワークと個別でのワークが学習効果につながったと考えられる。加えて、参加者が、それぞれ学んだ内容に応じた目標を立て、ホームワークを行い、参加者の前で発表したことは、自分自身の学びの振り返りとなったり、学びを異なる視点で捉え直すことが可能となったり、共感性を高め参加者同士のつながりを強くしたことなどが考えられる。

今回の講座では参加者が集中して受講できる環境を用意することも大切であると考え、K 短期大学の卒業生及び学生による託児ボランティアと行政の職員で託児を行った。子ども同士顔を合わせる回数が重なると子ども同士の関わりが見られるようになったり、学生が参加者と自然に会話をするなど3者にとって本来の目的以外の効果が見られた。

市町村が主体となりPTを推進していくことは、厚生労働省が行った市町村で実施するペアレント・トレーニングに関する調査（趣旨）[6]の中で、各市町村において支援を求める保護者が身近なところで PT などの子育て支援を受けられる体制づくりが求められていると述べられている。

今後もK町でPTを持続して行える仕組みを考えた場合、深澤(2017)が、「ペアレント・トレーニングの実践がさらに連動して、地域で主体的にペアレント・トレーニングを実践する公的機関が増えることは、今後、地域の中でその親子と継続的に関わり、きめ細かな支援ができる可能性が高まるのではないかと考える。」[7]と指摘しているように、行政が主体となり枠組みを作り推進していくことは大切になる。しかし、PT講座の必要性が高く広く周知していくためには、特定の講師が講座を行い続け専門職依存を作るのではなく受講された保護者の中から PT を進めていく役割を担う人材になる仕組みの構築など考えていくことが重要となる。

また、研修会場まで到着する時間や距離の長さ等、道東地域の特性や対面での受講が厳しいと感じられる保護者などの状況を考えた場合、オンラインを使用しての受講ができる仕組みを構築していくことでより多くの保護者が学ぶことが可能になると考える。

加えて、自発的に参加を希望される保護者はもちろんのこと、何らかの育てにくさを抱えながらも、自ら進んで相談につながりにくい保護者が受講しやすくなるようなアプローチを考えていく必要がある。

この他、PTの講座は全6回となっているが、参加者がより参加しやすい講座の回数や内容を検討していく必要がある。

以上のことから、K町で実施したPTで得た効果と課題について考察した。
今後もPTの実践を通して、地域の特色を生かした子育て支援をデザインしていきたい。

引用文献

1）2）令和元年度障害者総合福祉推進事業『ペアレント・トレーニング実践ガイドブック』
p.6

3）中田洋二郎（2010）発達障害のペアレントトレーニング 短縮版プログラムの有用性に関する研究　立正大学心理学研究所紀要 8 号
4）中田洋二郎（2023）『発達障害のペアレント・トレーニング簡易版～プログラムの進め方と運営のコツ』中央法規.
5）厚生労働省ペアレント・トレーニング支援者用マニュアル
https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000799077.pdf　pp134
6）市町村で実施するペアレント・トレーニングに関する調査（趣旨）
https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000099419.pdf
7）深澤大地（2017）地域の公的機関が協働して実践するペアレント・トレーニングの効果－地域の体制づくりとプログラムの実践－　東京福祉大学・大学院紀要　第 8 巻第 1 号 pp.15-24

参考文献

・ペアレント・トレーニング実践ガイドブック（厚生労働省；一般社団法人日本発達障害ネットワーク JDDnet 事業委員会作成、令和元年度障害者総合福祉推進事業）
https://www.mhlw.go.jp › content
・ペアレント・トレーニング支援者用マニュアル（2021）（厚生労働省；一般社団法人日本発達障害ネットワーク作成）https://www.mhlw.go.jp › content
・阿部美穂子　深澤大地（2011）教育相談機関におけるグループペアレント・トレーニングの効果と参加者アンケートによるプログラムの妥当性の検討　富山大学人間発達科学部紀要　第 5 巻第 2 号 pp.29-39
・肥後祥治　今村幸子 遠隔方式によるワークショップを多用した保護者支援プログラムの効果に関する予備的研究　科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C),平成 31 年度～令和 3 年度「離島における特別支援教育資源の再開発と機能化に関する実践的研究(19K02934)」
・高山桃香　板倉憲政（2023）ペアレントトレーニングの効果に影響を与える阻害要因について 岐阜大学教育学部研究報告人文科学　第 72 巻第 1 号 pp.175-182
発達障害者支援法改正(2016)（厚生労働省）https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000128829.pdf
・児童発達支援ガイドライン（厚生労働省）2017 https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000171670.pdf

日本の幼稚園教育とアメリカ・テネシー州の Kindergarten 教育の比較研究

―それぞれの教育要領から―

篠木　真紀

（釧路短期大学幼児教育学科）

はじめに

幼児教育は、子どもの成長と学習の基盤を築く重要な段階であり、各国の文化的・社会的背景を反映して異なる教育体系が存在する。日本の幼稚園における幼児教育は、文部科学省の「幼稚園教育要領[1)]」に基づき、全人的な発達を重視した教育が行われている。一方、アメリカ合衆国は日本のように合衆国全土で統一された教育要領は存在せず、各州独自に設定されている。筆者は 2024 年 7 月から 8 月にかけて、テネシー州にある Austin Peay 大学を視察し、幼児教育に関する研修を受ける機会を得た。幼児教育教員養成のカリキュラムや保育観察などを通して、テネシー州の教育システムと日本の幼児教育の比較検討が必要と考えた。

テネシー州の幼児教育は、Tennessee Department of Education（テネシー州教育局）から発行されている「Tennessee Early Learning Developmental Standards（TN-ELDS）テネシー州幼児学習発達基準[2)]」に基づき、学問的スキルと発達の両方を重視するカリキュラムが組まれている。本論文では、日本とテネシー州の幼児教育の違いを、文部科学省発行の「幼稚園教育要領」と Tennessee Department of Education 発行の Tennessee Early Learning Developmental Standards（以下 TN-ELDS）から、教育方針、教育内容、指導方法、評価を比較し、両国の幼児教育がどのように幼児の発達を支援しているかを検討する。

日本の幼児教育は、幼稚園、保育所、認定こども園などに分かれ、それぞれ「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が提示されているが、本論では「教育」に観点を絞り、日本の幼稚園とテネシー州の Kindergarten を比較対象として扱う。

１．日本とテネシー州の幼児教育と義務教育

（１）日本の幼稚園と小学校入学年齢

日本の幼稚園はその年の4月1日の時点で3歳に達している子どもが入学可能であり、3歳児（年少クラス）、4歳児（年中クラス）、5歳児（年長クラス）の３学年がある。園によっては3歳児～5歳児が合同（縦割り保育など）で保育を行う場合もある。日本では幼稚園はもとより保育所、認定こども園も義務教育ではなく、各園に通わせるかどうかは家庭の判断による。

小学校には、その年の4月1日までに6歳になっている子どもが入学する。日本では小学校から中学校（6歳児～15歳児）は義務教育であり、すべての子どもが学校に通う。

（２）テネシー州の幼稚園（Kindergarten）と義務教育

テネシー州における日本の幼稚園にあたる Kindergarten は、その年の 8 月 15 日までに 5 歳になる子どもが入園する。テネシー州では、Kindergarten は義務教育の一部とされており、5 歳児は 1 年間の幼稚園教育を経て、小学校（Elementary School）の 1 学年（Grade 1）に進む。

小学校（Elementary School）は、その年の8月15日までに6歳になる子どもが入学し、1学年（Grade 1）から5学年（Grade 5）、もしくは6学年（Grade 6）の学年構成である。義務教育は日本の高校にあたる18歳までである。特筆すべきは Kindergartenは義務教育のため、Kindergartenに通わないと小学校に入学できず、その点では日本と異なっている。[3] またテネシー州の公立教育システムでは、Kindergartenは通常、小学校の最初の学年として組み込まれており、小学校と同じ校舎で学ぶことが一般的である。これは、日本の幼稚園が独立した施設として運営されていることがほとんどであることに対して対照的な特徴と言える。

5歳児の前の教育システムについて述べると、テネシー州では一部の公立学校でPre-K（プリ・ケイ）と呼ばれる4歳児（その年の8月15日までに4歳になる子ども）向けのプログラムを提供している。これは義務教育ではなく、通うかどうかは各家庭の判断による。さらに経済的困難や特別支援が必要な子どもを対象にしたVoluntary Pre-Kというプログラムもあるが、これもPre-K同様、義務教育ではない。

２．日本とテネシー州の教育内容

（１）日本の幼稚園教育要領における教育内容

日本の幼児教育は、文部科学省が定める「幼稚園教育要領」に基づき、幼児期に必要な発達を促すための 5 つの領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）を中心に教育が行われる。この 5 領域は、幼児期の成長を総合的に支援し、子どもが小学校に移行する際の基礎を築くことを目的としている。本項では、各領域の内容と具体的な指導方法について説明する。

１）健康

「健康」の領域では、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うことを目的としている。身体的な発達だけでなく、安全に過ごすための習慣形成や、自己管理能力の育成も含まれる。

ねらいとして「明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。」、「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。」、「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。」が掲げられており、具体的な活動として、かけっこ・ボール遊び・鬼ごっこなどの運動遊びを通じて運動能力を育むことや、野菜の栽培や調理体験などの食育活動を通じて食事の大切さを学ぶ、手洗いや歯磨きの習慣化を促し健康的な生活習慣を身につける、防災訓練を行い危険を回避する力を養うなどが例として挙げられる。[4]

２）人間関係

「人間関係」の領域では、他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養うことを目的としている。幼児期における人間関係の形成は、コミュニケーション能力の向上や、集団生活への適応に不可欠である。

ねらいとして、「幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。」、「身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。」、「社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。」が掲げられており、具体的な活動として、ごっこ遊びを通じて役割分担やルールの大切さを学ぶことや、合奏・ダンス・劇遊びなどのグループ活動を通じて協力することの大切さを経験する、友達との関わりを通して適切なコミュニケーション方法を学ぶ、誕生日会やイベントを通じて、友達を祝う気持ちや思いやりの心を育てるなどが挙げられる。[5]

３）環境

「環境」の領域では、身の回りの自然や社会環境に興味を持ち、探究心を育むことを目的としている。幼児期における環境との関わりは、科学的な思考力や問題解決能力の基盤を築くために重要である。

ねらいとして、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」、「身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。」、「身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」が掲げられており、具体的な活動として、虫取り・植物の観察など自然観察を通じて自然への関心を高める、水の性質や磁石の働きなど実験遊びを通じて科学的思考力を育む、消防署・警察署・スーパーなどの社会見学を通じて社会の仕組みを学ぶ、ペットボトル工作や紙の再利用などリサイクル活動を通じて環境保護の意識を高めるなどが挙げられる。[6)]

4）言葉

「言葉」の領域では、コミュニケーション能力や語彙の発達を促し、思考力を伸ばすことを目的としている。幼児期における言語発達は、読解力や表現力、論理的思考の基盤を作る重要な要素である。

ねらいとして、「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。」、「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」、「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」が掲げられており、具体的な活動として、絵本の読み聞かせを通じて物語の楽しさを伝えることや、詩や歌の暗唱を通じてリズムや言葉の響きを学ぶ、しりとりや言葉遊びを通じて語彙力を増やす、お話づくりを行い自分の考えを表現する練習をするなどが挙げられる。[7)]

5）表現

「表現」の領域では、創造性を育み、自己表現の楽しさを体験することを目的としている。幼児期の表現活動は、自由な発想を促し、感性を豊かにすることにつながる。

ねらいとして、「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。」、「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」、「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」が掲げられており、具体的な活動として、絵画や粘土遊びを通じて自由な発想を楽しむことや、楽器遊びやリズム遊びを通じて音楽の楽しさを体験する、ダンスや劇遊びを通じて表現力を養う、折り紙や紙工作を通じて細かい動作の発達を促すなどが挙げられる。[8)]

（2）テネシー州 Kindergarten における教育活動

テネシー州の幼稚園（Kindergarten）は、5歳児を対象とし、小学校（Grade 1）へのスムーズな移行を目的とした義務教育の一部である。この段階では、子どもたちが社会性や基礎学力を身につけるために、言語リテラシー、数学、科学、社会・感情の発達、運動発達などの分野で体系的な学習活動が行われる。教育はTN-ELDSに基づき、遊びを取り入れながら、子どもたちが自発的に学べる環境を提供する。

1）言語とリテラシー（Language & Literacy）

言語能力の発達は、テネシー州のKindergartenにおいて最も重視される分野の一つであり、子どもたちが基本的な会話力を身につけ、文字を認識し、簡単な読解や筆記ができるようになることを目指している。

具体的な活動として、

・読み聞かせ（Read-Aloud Activities）：教師が絵本を読み聞かせ、子どもたちは物語の流れを理解し、登場人物の気持ちを考える。
・フォニックス（Phonics Instruction）：アルファベットの音を学び、単語の構成を理解する。
・ライティングの練習（Emergent Writing）：子どもたちは自分の名前を書く練習や、簡単な単語を綴ることに挑戦する。
・会話スキルの強化（Oral Language Development）：教師や友達との対話を通じて、文章を構成する力を育む。
が挙げられる。[9)]

２）数学（Mathematics）

Kindergartenでは、数の概念を理解し、簡単な計算ができるようになることを目的とした数学教育が行われる。数学的思考を身につけるため、具体物を使った活動が多く取り入れられる。
具体的な活動として、
・数を数える（Counting & Number Sense）：1から20までの数字を数え、数字の順序を理解する。
・数の比較（Comparing Numbers）：大きい・小さい、多い・少ないといった概念を学ぶ。
・形の認識（Geometry & Spatial Awareness）：丸・三角・四角といった基本的な図形を識別し、物の位置関係を理解する。
・簡単な足し算・引き算（Basic Addition & Subtraction）：具体物（ブロックやおもちゃ）を使って数を足したり減らしたりする活動を行う。
などが挙げられる。[10)]

３）科学（Science）

科学の学習では、子どもたちが自然現象や物の仕組みに興味を持ち、探究心を育てることを目的としている。幼児向けの科学活動は、実験や観察を通じて「なぜ？」と考える力を養うことに重点を置く。
具体的な活動として、
・自然観察（Nature Exploration）：屋外活動で植物や昆虫を観察し、季節の変化を学ぶ。
・簡単な実験（Simple Experiments）：氷が溶ける様子や、水に浮く・沈む物の違いを実際に観察する。
・天気の学習（Weather & Seasons）：天気の変化を記録し、気温や雨の影響を学ぶ。
などが挙げられる。[11)]

４）社会・感情の発達（Social & Emotional Development）

Kindergartenでは、学力だけでなく、子どもたちが社会の一員として協調性を身につけ、感情を適切に表現できるようになることも重要な教育目標である。
具体的な活動として、
・ルールとマナーの学習（Classroom Rules & Expectations）：授業中のルールや順番を守ることを学ぶ。
・友達との協力（Cooperative Play）：グループ活動を通じて、他者との関わり方やチームワークの大切さを学ぶ。
・感情の表現（Emotional Awareness）：自分の気持ちを言葉で伝えたり、他者の感情を理解する練習をする。
などが挙げられる。[12)]

５）運動発達（Physical Development）

身体的な発達を促進するため、運動遊びや細かい作業を通じて、粗大運動と微細運動の両方を鍛える活動が取り入れられる。

具体的な活動として、

・運動遊び（Gross Motor Skills）：かけっこ、縄跳び、ボール遊びなどの活動を通じて、バランス感覚や筋力を育てる。

・手指の動作（Fine Motor Skills）：折り紙、ひも通し、粘土遊びなどを行い、手指のコントロールを鍛える。

・基本的な生活動作の練習（Self-Help Skills）：ボタンを留める、靴を履く、食事をするなどの動作を練習する。

などが挙げられる。[13)]

６）アートと音楽（Art & Music）

創造力を育むため、アートや音楽活動が積極的に取り入れられる。

具体的な活動として、

・絵画と工作（Drawing & Crafts）：自由に絵を描いたり、紙や布を使って作品を作る。

・楽器遊び（Musical Exploration）：タンバリンやマラカスを使ってリズム遊びをする。

・歌とダンス（Singing & Movement）：童謡を歌ったり、音楽に合わせて体を動かす活動を楽しむ。

などが挙げられる。[14)]

テネシー州の Kindergarten では、言語・リテラシー、数学、科学、社会・感情の発達、運動発達、アートと音楽といった幅広い分野で教育が行われる。これらの活動は、遊びを取り入れながら学ぶ形で提供され、子どもたちが小学校にスムーズに適応できるようなスキルを身につけることを目的としている。特に、テネシー州では学問的スキルの基礎を固めることに重点が置かれており、日本の幼児教育と比較すると、より学校教育への準備が強調される傾向がある。

対して、日本の幼稚園は、子どもの全人的な発達を支援し、バランスの取れた成長を促すことを目的としている。特に、「遊びを通して総合的な発達を促す」と教育要領にも記載されており[5)]、幼児が自然な形で興味を持ち、自発的に学ぶ環境が整えられている。教育要領のねらいにも、充足感や楽しさ、喜びを味わい、心を通わせるなど、心の成長や豊かな情操に重点が置かれていると考えられる。このような教育方針は、テネシー州の学問的なアプローチと対比すると、日本の幼児教育の独自性が際立つポイントである。

３．日本とテネシー州の幼稚園の指導支援

（１）日本の幼児教育における指導支援

日本の幼児教育では、「遊びが子どもの成長を促す」という考え方が根付いており、教育活動の多くが遊びを通じて行われる。子どもは遊びの中で社会性、創造力、問題解決能力を自然に身につける。

１）遊び

遊びには、自由遊び（子どもが自分の興味に基づいて活動を選び、試行錯誤しながら学ぶ）、設定遊び（教師がテーマを設定し、それに沿った遊びを通じて特定の学びを促す）、異年齢交流（異なる年齢の子どもが一緒に遊ぶことで、年上の子がリーダーシップを学び、年下の子は模倣を通じ

て学ぶ）などが挙げられるが、保育者はそれらの遊びをバランスよくかつ効果的に配置し、子どもの情操や人間関係、発達を促す。

２）環境構成

環境構成に関しては、日本の幼児教育では「環境が子どもの成長に大きな影響を与える」と考えられており、子どもが自発的に学べるように教育環境の設計が重視される。保育室では教材やおもちゃが自由に使えるように配置され、子どもが自発的に活動できる環境を整える。屋外活動も重視され、園庭や自然の中での活動を積極的に取り入れ、自然観察、どろんこ遊びなど子どもが体を動かしながら学べる機会を増やしている。また地域と連携し、近隣の商店や公共施設を訪れ、実際の社会生活の中で学ぶ機会を提供している。

３）保育者の関わり

日本の幼児教育において、保育者の役割は単なる知識の提供ではなく、子どもの成長を支援するファシリテーターとしての役割が求められる。保育者は子どもの行動を細かく観察し、一人ひとりの発達段階や興味を把握する。その記録をもとに、適切な活動を提供する。また、保育者は一方的に教えるのではなく、「どうしてこうなるのかな？」「他にどんな方法があるかな？」といった問いかけを通じて、子どもの考える力を引き出す。さらに個々の子どもに寄り添う指導を行う一方で、集団の中でのルールや協調性を学ぶ機会も提供する。

４）家庭との連携

家庭との連携においては、園や家庭での様子を情報共有するなどが重要であり、連絡帳や日々のやり取り、保育参観や行事の参加などを通して保護者とのコミュニケーションが積極的に行われる。

（２）テネシー州 Kindergarten における指導支援

テネシー州の幼児教育における指導方法は、テネシー州早期学習発達基準（TN-ELDS）に基づいており、発達段階に応じた個別指導とデータに基づく教育が重視されている。これにより、子ども一人ひとりの成長を適切に支援し、幼児期からの学習基盤を強化することが目的とされている。

１）遊びを通した学習と構造化された学習

TN-ELDSでは、遊びを通じた学習（Play-Based Learning）と構造化された学習（Structured Learning）のバランスを取ることが重要視されている。これは、子どもが自然な環境で学ぶことの利点を生かしつつ、学問的なスキルを育成するためである。

遊びを通じた学習は、幼児期の学習は自由な遊びの中で自然に発達するものとの考えから、創造的な遊び（Creative Play）、ごっこ遊び（Pretend Play）、ブロック遊び（Constructive Play）などが積極的に取り入れられる。例えば、リテラシーのスキルを育むために、子どもたちが自分で「お店ごっこ」をしながらメニューを作成し、読み書きを実践する場面が設けられる。

構造化された学習については、例えば毎日のリテラシーや数学の時間のような、ある程度計画された活動が設けられ、子どもたちが集中して学ぶ時間が確保される。例えば、教師が絵本の読み聞かせを行った後、子どもたちに登場人物についての質問を投げかけ、言語理解を深める活動が行われる。

２）発達段階に応じた個別指導

テネシー州の幼児教育では、子どもの発達段階に応じた個別化指導（Individualized Instruction）が重要視されている。これは、すべての子どもが同じペースで学習するわけではないことを考慮し、一人ひとりの発達の進行に合わせた教育を行うための指導法である。

TN-ELDSでは、年齢ごとに「発達マイルストーン（Developmental Milestones）」[15]が設定されている。これは子どもが特定の年齢までに身につけるべきスキルや行動の目安を示したもので、それに基づいて子どもの学習計画が調整される。例えば、５歳児であれば、リテラシーの面では「少なくとも２つの出来事について、聞いた話や作り話をする。例えば、猫が木に挟まっていて、消防士が助けたなど。」、数学の面では「1から10までの数を数えられること。」といった具体的な基準が設けられている。

特に、学習に困難を抱える子どもや発達に遅れが見られる子どもに対しては、個別指導計画（Individualized Learning Plans、 ILPs）が作成される。これは、特別支援教育の考え方を取り入れたアプローチであり、子どもごとの学習ニーズに対応する形でカリキュラムを調整するものである。子どもの発達状況をより正確に把握するため、教師と保護者が定期的にコミュニケーションを取り、家庭での学習環境も考慮しながら指導方針を決定する。

３）データに基づいた指導支援

テネシー州では、教育の質を向上させるためにデータに基づいた指導（Data-Driven Instruction）が積極的に採用されている。これは、子どもの学習進捗をデータとして記録し、それを基に指導を調整する方法である。

テネシー州の幼児教育における指導方法は、遊びを通した学習と構造化学習、個別化指導、データに基づく教育という3つの要素を中心に設計されている。これにより、子ども一人ひとりの発達を最大限に引き出し、小学校へのスムーズな移行をサポートすることが可能となる。このアプローチは、日本の幼児教育とは比べてより学問的スキルの育成とデータ分析を重視したものとなっていると言える。「遊び」についても、日本は遊びを通して子どもの成長を促すという観点であるが、テネシー州の遊びは学びにつなげていく意味合いが強いと考えられる。

４．日本とテネシー州の幼稚園の評価

（１）日本の幼児教育における評価

日本の幼児教育では数値的な評価よりも、子どもの成長過程を観察し長所や個性を伸ばすことが重視され、観察を重視した評価と言える。各園が独自で設定している評価フォーマットに子どもの成長の様子を記録したり、子どもの作品や成長記録をファイルにまとめるポートフォリオなどを通し、全人格的な成長を分析する。

教育要領には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳心・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の１０項目が指針と示されているが、明確な数値的目標などは記載されていない。また評価について「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人の良さや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。」[16]と記載されており、発達段階や年齢・月齢に分けた到達基準に依らない評価を行っていると言える。

日本の幼児教育における指導方法は、子どもの主体性を尊重し、遊びを通じて総合的な発達を促すことが特徴である。また、環境を活用した教育、教師の観察と対話、保護者との連携が重要視され、子どもが自分で考え、行動し、社会性を育むことを目的とした指導が行われている。数値的な評価よりも成長過程の観察を重視する点が、アメリカ・テネシー州の幼児教育と異なる大きな特徴である。

（２）テネシー州の幼児教育における評価

テネシー州の幼児教育における評価方法は、子どもの発達と学習の進捗を客観的に把握し、適切な指導へとつなげることを目的としている。特に、データに基づく評価（Data-Driven Assessment）の考え方が強く取り入れられており、個々の子どもの成長に応じた教育を提供するための基盤となっている。

評価方法で取り上げられている１つの方法に形成的評価（Formative Assessment）が挙げられる。形成的評価とは、日々の教育活動の中で子どもの学習進捗を観察し、教師がリアルタイムで指導の改善を行うための評価方法である。これは、子どもの発達段階に応じた適切な支援を行うために不可欠なプロセスである。

教師は、日常の遊びや活動を通じて子どもの行動を観察し、その記録をもとに発達の傾向を分析する。例えば、言語の発達に関する評価では、「子どもがどの程度自発的に会話をするか」「単語をどのくらいの範囲で理解しているか」などを細かく記録する。

またTN-ELDSでは、年齢ごとに習得すべきスキルや行動のリスト（Developmental Checklists）が前述した発達マイルストーンにより設定されており、教師はこのチェックリストを用いて、子どもが期待される発達段階を達成しているかを確認する。この評価方法の利点は、子どもの発達状況を継続的に把握し、必要なサポートを即座に提供できることにある。

また日本と同様にポートフォリオを用い、子どもが作成した絵、工作、文字の練習帳、発表資料などをポートフォリオに収めることで、子ども自身がどのように成長しているかを明確にする。これにより、教師や保護者が学習のプロセスを追跡、可視化し、適切な指導方針を立てることができると考えられる。

さらに一部の幼児教育機関では、学習データをデジタル化し、教師が子どもの進捗をリアルタイムで把握できるようにしている。例えば、「Teaching Strategies GOLD」といった評価ツールを用いて、子どもの発達状況をデータベース化し、教育方針の改善に役立てるケースも増えている。

テネシー州の幼児教育では、TN-ELDSの各年齢に沿った定量的、客観的な評価が用いられており、子どもの発達状況を分析する仕組みが整えられている。データに基づく評価によって、客観的な情報をもとに指導を改善しながら、個別のニーズに対応することが可能となっている。この評価方法は、日本の幼児教育の「観察を中心とした柔軟な評価」とは対照的であり、学習成果を明確に可視化し、小学校教育との連携を意識したシステムである点が特徴的である。

まとめ

本論では、日本の幼稚園教育とテネシー州のKindergarten教育を比較し、それぞれの教育方針、教育内容、指導方法、評価の違いについて検討した。日本の幼児教育は、遊びを通じた全人的な発達を重視し、特に社会性の育成や自主性の向上に重点を置いている。一方、テネシー州のKindergartenは、学問的スキルの習得を重視し、小学校教育との連携を意識したカリキュラムが組まれている点が特徴的である。

また、日本では数値的な評価よりも観察を通じた個別支援が中心であるのに対し、テネシー州では学習成果を測定し、データに基づいた指導が行われる。この違いは、幼児教育における目標の違いに起因していると考えられる。両者の教育体系は異なるものの、子どもが主体的に学び、成長できる環境を提供するという共通の目的を持っている点は重要である。今後は、各国・各地域の教育の長所を生かし、より良い幼児教育のあり方を模索することが求められる。

引用・参考文献

1）文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説　平成 30 年 3 月」フレーベル館
2）Tennessee Department of Education(2018)「Tennessee Early Learning Developmental Standards」2024 年 8 月 6 日
https://www.tn.gov/education/districts/academic-standards/early-learning-development-standards.html
3）Japan-America society of Tennessee, inc.「Japan-Tennessee Guide」2025 年 2 月 28 日
https://www.jptnguide.org/education
4）文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説　平成 30 年 3 月」フレーベル館　pp.145-156.
5）同　pp.157-181.
6）同　pp.193-206
7）同　pp.213-224.
8）同　pp.233-243.
9）Tennessee Department of Education(2018)「Tennessee Early Learning Developmental Standards」pp.9-10.
10）同 pp.16-17.
11）同 pp.19-21.
12）同 pp.6-7.
13）同 pp.23-24.
14）同 p23.
15）U.S. centers for disease control and prevention ,「Important Milestones: Your Child By Five Years」2025 年 3 月 2 日 https://www.cdc.gov/ncbddd/actearly/milestones/milestones-5yr.html
16）文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説　平成 30 年 3 月」フレーベル館　p121.

「より良い人間関係」を構築する上で強化したいビリーフやスキル

高畠　昌之

１．はじめに

「より良い人間関係」とはどのようなものか？この定義を明確にすることは思考を深める際の出発点となる。教育現場で３８年間関わった経験やカウンセリングを通して相談業務を進めるうえで考えてみた。「より良い人間関係」とは、『互いに想いを伝えあい納得感の高い“折り合い“を見つけられる関係性』だと定義したい。では、そのような関係になるためには、どんな考え方（ビリーフ）や方法（スキル）があるのだろうか？

関係性の行動スキルは何か？それは、「聴く」「伝える」「話し合う」の３つである。相手の目で見て・相手の耳で聴いて・相手の心で感じる『共感性』を持って話を聴く。自分の思いや考えを誠実に正直に伝える『自己主張』を行う。そして、互いの納得感が多く感じられる折り合い点を見つける話し合いをする。この話し合いとは、周囲に合わせる「順応」ではなく、自分の想いと周囲の想いを混ぜながら正解を求める『適応』の営みである。これを突き詰めていけば「より良い人間関係」は構築できる。また、コミュニケーションが上手くいかない要因の明確化や回復力を高めることで「より良い人間関係」の達成はより可能になる。

２．行動の四角形による「聴く」「伝える」「話し合う」[1)]

２－１　トマス・ゴードン博士による「行動の四角形」

トマス・ゴードン博士によって開発された。ゴードン氏は、「問題行動を持って困っている」といわれている子どもたちに会ってみると、親や教師への日常的な対応への不満がいっぱいであり、問題行動は、報復ではないかと思ったと著書に書いている。「行動の四角形」とは、『否定的な感情に上手く対処する』方法でもある。

２－２　行動の四角形

自分の身体を四角形に見立て、受容線で「受容領域」「非受容領域」に分けるこの四角形は、相手ひとりに対して一つずつ作る。相手の行動を☆で表して書き込む。☆の入っている四角によって対応を変える。

受け入れられない行動をされると「困る」「心配だ」と否定的な感情が起こる。☆は、「非受容領域」に入り「自分が問題を抱える」ことになる。自分に起こった否定的な感情に対処しなくてはならない。

自分に起こった否定的な感情への対処は、相手に想い

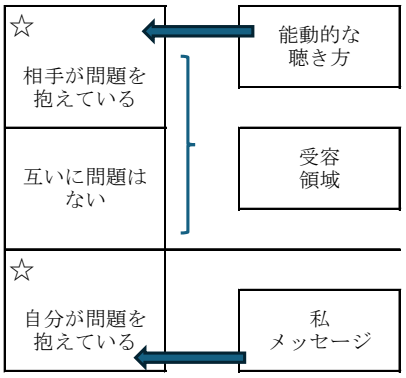

図１行動の四角形

を伝えることである。その際に効果的なのが「私メッセージ」である。「３部構成（事実・影響・気持ち)」で伝える方法で、「忘れ物を続けると（事実)、勉強が遅れる（影響）と思って、心配なの（気持ち)」などである。

相手が困り感を抱えている場合は、☆は、「受容領域」の「相手が問題を抱える領域」に入る。相手が問題を抱えているのだから、それを聴いてあげるのが最良の関係である。答えを教えるのでなく、考えや価値観を述べるのでもなく、ひたすら聴くのである。聴き方は、「言った言葉をそのまま返す」「言葉を変えて返す」「相手の気持ちを言う」のどれかを使う。

「行動の四角形」の大きなねらいは、否定的な感情に上手く対処し、☆が「問題なし領域」に入るようにすることである。☆がどこに入るのかを意識しながら、「相手の困り感」であれば「能動的な聞き方」を使い、「自分の困り感」になれば「私メッセージ」を使うなど状況に合わせてかかわり方を変える。これを「きりかえ」と呼んでいる。

「行動の四角形」の失敗例として、『 相手が不満そうなのに「伝える」技法を使い続ける 』『 技法を変えて「聴く」技法にしているがノンバーバルは聴いていない 』『 相手の弁解を「言い訳」として更に「伝える」をかぶせる（だいたい説教になる)』などがある。

２－３　「勝負なし法」での話し合い

「能動的な聴き方」や「私メッセージ」を使い分ける『きりかえ』を駆使しながら関係性を作っても、解決に向かわないこともある。

その時は、互いに意見を出し合いながら“折り合い点”を探す「勝負なし法」をしてみる。そもそも、対立は「争い」ではない。自分がどれほど相手を大切にし、思いやりをもち、支援もして、お互いの関係がどれほど絶対的に素晴らしいものであっても、対立は起こるのである。対立は「問題」であり解決できる。対立を「争い」と定義してしまうと勝つか負けるかになる。

表１勝負なし法

勝負なし法（６段階のプロセス）
第１段階　；　問題を定義し、話し合いの同意を求める
第２段階　；　互いに、たくさんの解決策を出す。
第３段階　；　解決策を○△×で、評定をする。
第４段階　；　解決策の決定をする。
第５段階　；　実行日を決めて実行する。
第６段階　；　評価する。

対立を「問題」として定義すれば、扱い方は変わってくる。問題は解決できるのである。対立という問題を解決するための６つのステップが、「勝負なし法」（「勝つ」「負ける」という勝負自体がない）である。その解決に使われるプロセスは右記の６段階で行われる。

３．ミス・コミュニケーションのメカニズム[2)]

３－１　脳のメカニズム … 「「快・不快の原則」「焦点化の原則」「空白の原則」

「そんなつもりで言ったんじゃないのに・・」と想いが誤解されたり、違う内容で受け取られたりすることを「ミス・コミュニケーション」という。なぜ、ミス・コミュニケー

ションが起きるのか？それには、脳のメカニズムに触れる必要がある。脳には不思議なメカニズムがある。「快・不快の原則」「焦点化の原則」「空白の原則」という３つの原則である。

脳は、心地よいことは続けて不快なことは避けようとする。これを「快・不快の原則」と呼び、脳は 2 つ以上のことをやることを嫌がりどれか一つに絞ろうとする傾向がある。これを「焦点の原則」と呼ぶ。最後に、脳は、自分の身を守ることを第一としており、命の危険に繋がることは防ごうとする。答えが分からない未知なるものは命の危険に関わると判断して不快なものとして扱う。「死んだらどうなるのか？将来はどうなるのか？あの人は何を考えているのか?」などは、全て答えが分からないことである。このように答えが分からないものを「空白」と呼び、空白が続くと不快になるので、「空白」を確認したら「〇〇に違いない」「〇〇だろう」と答えを考えて、すぐに埋めることで安心しようとする。この動きを「空白の原則」と呼んでいる。

また、脳は、現実ではなくイメージで判断をする不思議なメカニズムを持っていることが分かっている。小さいころに犬にかまれて嫌な思い出があると、大きくなって目の前の犬は子犬でかまれても何でもないのに体が震えだす。脳の「快・不快の原則」が強く働いて、頭では分かっているのに体が拒絶してしまう。危険と判断したモノや場面から遠ざけようとするような脳の動きを「〇〇恐怖症」という症状で表現している。

３－２　ミス・コミュニケーションのメカニズムと防止策 … 「省略」と「わい曲」

人は、相手に情報を伝えるときにかなりの内容を「省略」している。そうでないといくら時間があっても足りない。だから、聴いている側は、分からないところがいくつか出てきてしまう。この場合、「空白の原則」「焦点の原則」が働いて、省略を埋めようとする。「省略」された空白部分を、自分の経験や考え方で不足分の情報を埋めようとする。その際に、自分なりの解釈で埋めることで、「省略」された情報を自分なりに解釈した物語で埋めてしまうので食い違いが生じてしまう。これを「歪曲」と呼ぶ。

SNS などのラインによるコミュニケーションは、言葉だけのやり取りだが、主語が抜けていたり助詞が抜けていたりなどで、「歪曲」がどんどん起きてしまう。この食い違いがミス・コミュニケーションと呼ばれるものになって、意見の食い違いや衝突につながるトラブルへと発展するのである。

コミュニケーションは、必ず「省略」や「歪曲」が起きるのが前提となる。相手の説明を聴いたときに、「今の話は〇〇ということでよろしいでしょうか？」と確認することで、「わい曲」を防ぐことができる。また、相手に話をした後に「今の話は、どのように受け止めましたか？」と確認することで、相手の「わい曲」を正すことができる。保育所や幼稚園は、「おたより帳」での連絡を取ることがほとんどだが、「省略」や「わい曲」によるミス・コミュニケーションが起きることを前提として、確認作業をすることで防ぐことが

期待できる。

３－３　メラビアンの法則　… コミュニケーションは、非言語が９割以上

同じ言葉の時に、メッセージとして何が相手に影響を与えるのかを表したのが、「メラビアンの法則」である。影響力は、言語が「７％」、言葉のトーンや速さが「３８％」、表情や態度が「５５％」である。つまり、言葉以外の非言語によるコミュニケーションが大事だということである。

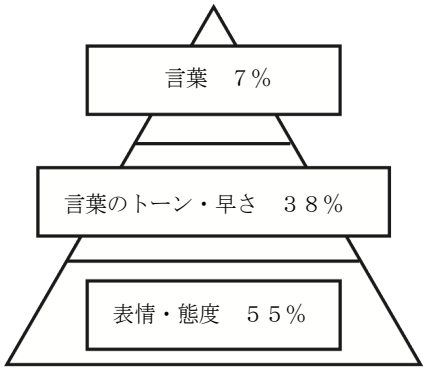

図２メラビアンの法則

人は、相手の表情や態度、言葉の強弱や雰囲気でメッセージを読み取るのである。しかし、SNSのコミュニケーションは、言葉だけによるものである。わずか７％のコミュニケーションスキルでのやりとりは、ミス・コミュニケーションの発生率は上がり、非言語からのメッセージを読み取るスキルが低下することで、騙されやすい脳の仕組みが強化される。子ども達は、相手の真意を読み取る危機管理センサーが作られないまま大人になってしまう危険性を考えないといけない。

４．アイデンティティとパフォーマンス

４－１　アイデンティティとは？

「自分はどのような人間なのか？」「自分は、いったい何者なのか」と自己理解を激しく求めていくのが思春期である。そして、自分はどんな人間で何を求めているのか？将来はどうなるのか？などと、自分という人間を定義づけしていくのである。この定義づける期間のことを「モラトリアム」という。アイデンティティとは、「自分が知っている自分」のことである。

４－２　パフォーマンスとは？

他人から見た〝その人らしさ“であり、周りが考えるその人の人格である。普段の見える姿や行動様式で周りが定義づけしていくが、見た目や噂などの一部の情報から定義される危険性がある。状況に合わせてみせる面（ペルソナ）を“その人らしさ“と判断して判断される場合が多々ある。パーソナリティとは、客観的に見た「他人が知っている自分」のことである。

４－３　言行一致と言行不一致

言行一致とは、「アイデンティティ（自分が知っている自分)」と「パフォーマンス（他人が知っている自分)」が限りなく似ている状態である。「自分は、秘密を守る人間である」

と思っている（アイデンティティ）ことと「あの人は、秘密を守る信頼できる人」と他人が思っている（パフォーマンス）ことが一致している状態である。

言行不一致とは、「アイデンティティ」と「パフォーマンス」が異なる状態である。「自分は、秘密を守る人間である」と思っている（アイデンティティ）のだが、「あの人は、すぐ秘密を周りに話す信頼のできない人」と他人が思っている（パフォーマンス）ことで、自己理解と他者からの評価が不一致している状態である。

４－４　ジョハリの窓

解放の窓（自己開示が多い）が広い人は、社交性があり親近感がある。自己開示とは、「考え・想い・身の回りの事実」を相手に示すことである。自己開示は、「空白の原則」を起こさせないので、相手の脳は安心する。

秘密の窓（自己開示が少ない）が広くなると、「空白の原則」が作動して、相手は不安になる。そのため「快・不快の原則」から回避しようとする。また情報が少ないため「わい曲」が起きやすい。

盲目の窓（メタ認知が弱い）が広い人は、自己認知（自分が思っている自分＝アイデンティティ）と他者認知（周りが思っている性格＝パフォーマンス）の言行不一致が大きく、孤立化が進んでいく。普段、意地悪をしている人が、助けようとしてかけた言葉なのに、皮肉を言われたと誤解される事例は少なくない。陰口を日頃、言っている人がひそひそ話をしていると悪口を言っていると誤解される。

ジョハリの窓	他人が知る自分	他人の知らない自分
自分が知る自分	**開放の窓**	**秘密の窓**
自分が知らない自分	**盲目の窓**	**未知の窓**

図３ジョハリの窓

５．レジリエンス[3)]

５－１　レジリエンスとは？

「回復力」「復元力」あるいは「弾力性」とも訳される言葉である。レジリエンスを「強さ」と解釈している場合に混同しやすい概念に「**ストレングス**」がある。「ストレングス」とは、「逞しさ」「力強さ」のことで、レジリエンスはこれらの意味よりも、ずっと柔軟な強さを表す。レジリエンスとは簡単にいうと「**しなやかな強さ**」のことである。

レジリエンスには弾力性がある。弾力性とは「跳ね返す力」とも言える。例えば個人に対して強いプレッシャーやストレスが襲っても、それを跳ね返す心の柔軟性や強さがあれば困難を克服できるであろう。しかし、もしプレッシャーやストレスを跳ね返す力、つまりレジリエンスが不足していれば、心が折れてしまうかもしれない。

「しなやかな強さ」の対義語は、「しなやかさ」「強さ」を失った状態、つまり「**脆弱性（もろくて弱い）**」である。よく「心が折れる」という言葉によって挫折感や心の落ち込みを表現するが、まさにその状態に**留まること**がレジリエンスを失っている状態といえる。

人は誰でも落ち込むことがある。心が折れてしまうこともあるかもしれない。しかし、レジリエンスがある人というのは、その逆境を糧にして大きく飛躍のチャンスに変えていったりする。

５－２　レジリエンスの大切な５つの要素

５－２－１　自己肯定感

ありのままの自分を受け止めること。自尊心（自分を価値ある存在と感じる）とは違い、自己受容に近い概念である。自己肯定感はレジリエンスのある心にとって基礎となる要素である。自己肯定感を高めるには、「自己決定・自己責任」「逆境の乗り越え」「他者貢献」「成功体験の積み重ね」「セロトニンの出る生活習慣」などが有効である。

５－２－２　感情の調整（コントロール）

感情をコントロールすることは、レジリエンスを発揮する上で非常に大切な要素であり、レジリエンスに乏しい場合の特徴として、物事に「一喜一憂」するという側面がある。アンガーマネジメント（怒りの制御）やストレスマネジメントでの「呼吸法」や「筋弛緩法」は感情の制御を高める効果的な手法である。

５－２－３　楽観性

人間は自分ではどうにもならないと感じる問題に直面した場合、無力感に襲われることが多くある。感情をコントロールするだけでは保てない心の葛藤を打破するには、楽観的な思考や感情が大切である。人間関係では、「過去と他人は変えられない」という原理原則に沿って、誠実に正直な気持ちで事を成し遂げた時の結果は、「まぁいいや」「仕方がないなぁ」と肯定的な諦め（前向きな気持ちの切り替え）をすることが、楽観性に到達する。

５－２－４　自己効力感

自己効力感とは自分が直面する問題に「自分なら大丈夫」という前向きな認識をすることである。自尊感情と異なる点は、自尊感情が「いま現在の自分」を前向きに捉えることであるなら、自己効力感は「いま現在の自分から未来に対する可能性への前向きさ」となる。たとえ今の自分が直面する問題が大きなものに見えても、自分なら乗り越えていけるという自分への期待ともいえる。

５－２－５　つながり

逆境に見舞われたとき、誰かがそばにいてくれるだけで救われる。古代からの記憶を紡いできた DNA は、孤立は死を意味することと捉えていると言われている。つながりを維持できるかどうかは、“生き死に”に関わることである。レジリエンスに資する「つながり」は、人間関係に限らない。つながりとして、もうひとつ挙げるのは、「スピリチュアリティー」である。自分が「大きなもの」につながっていると信じるとき、目の前の逆境がちっぽけなものに思えて、乗り越える勇気がわいてくる。同じく「大きなもの」につながっている大切な人を思うとき、私たちは果敢に闘うことができるのである。

６．終わりに

人は、現状に「不満」があると何かを変えようと思う。しかし、先が読めない「不安」

から行動を起こせずにいることが多い。「不満」と「不安」を天秤にかけた時、結果が分かる安心感から「不満」を選び、「どうせ○○だから」と自己正当化の理由をさがしながら、「不満」の現状を受け入れる。先が読めない「不安」があっても、現状を変えて「より良い変化」を求める行動を起こすには“勇気”が必要になる。人間関係には、“傷つくリスクを背負う勇気”がどうしても必要なのだ。引きこもる生き方を選んだ人は、勇気がくじかれた人たちである。勇気を持つことができれば違う生き方も選択できる。勇気づける考え方や方法を学ぶことは、人間関係をまんざらでもない幸せなものに変えてくれる。

自分を大切にするとは、自分に甘くするということではない。どんな時も自分の言動（言っていること・やっていること）を見つめ返す時間を大切にするということである。自分に正直に向き合い続ければ、人間関係を作る経験も壊す経験も、人としての「幅」になる。「そうか、こんな人もいるんだ、あんな人もいるんだ、自分にはない考え方だな！吸収したいな！」というように考え方の「幅」が広がっていく。

「やってしまったこと」に傷つき、いつまでも自分を責めることを「後悔」という。後悔
を使う人の目的は、傷ついた相手よりも自分の方が傷つくことで罪の意識から逃れようとすることである。「やってしまったこと」と向き合い、同じことをくり返さないように「何をどう変えていくか」を考えていくのが「反省」である。謝る勇気を持てた人は、相手が謝ってきたときに勇気を出した結果だと理解できるので、「許す」という感情が出てきやすい。また、許してくれるかどうかは、相手が決めることである。許してくれないのは「心が狭い」からではなく「それだけ心が深く傷ついた」と理解しなくてはいけない。でないと「私がこんなに謝っているのに」と逆ギレするという恥ずかしい生き方を身につけてしまう。

学校の教師は、子ども同士でトラブルが起きたときに「あなたはどうしたいの？」「どうなるといいの？」と自分で決めるように促していく。どうしてもトラブルが続くのであれば、「敬して近づかず」を伝えていく。これは、どんな人も幸せになろうと生きているし大切に思っている家族もいる。だから、「存在を否定せずに命あるものを尊敬はするが、今は距離を置く」という生き方である。トラブルが起きたときに子どもたちは、「相手が変わらないこと」に腹を立てている。「過去と他人は変えられない」という不条理（変えることができないもの、答えがないもの）の対処法は、「受け止める」しかないことを子ども達に伝えている。子どもに関わる仕事に従事する人は、モデリング（なってほしい姿をしてみせる）を強く意識する事が大切である。自らが“より多くより早く“してみせるのが、最も教育効果の高いモデリングである。

【 参考文献 】

１）トマス・ゴードン（訳）近藤千恵（2002）『ゴードン博士の人間関係をよくする本』大和書房
２）加藤 聖龍（2013）『たった今から人生を変える NLP』 リベラル社

山崎 啓支（2007）『NLP の基本がわかる本』 日本能率協会マネジメントセンター
３）工藤 紀子（2024）『レジリエンスが身につく自己効力感の教科書』 総合法令出版

愛着障害やパーソナリティ障害についての考察

高畠　昌之

１．はじめに

学校現場では、発達障害とされる児童が増え続けている。ただ、その中には「愛着障害」だと思われる児童が多数いる。実際、専門家に聞いても見分けが難しいと言う。親子の身体的・精神的な接触が少ないネグレクトと呼ばれる児童虐待は、悪質なものから結果としてなってしまうものまで多様な形で増えている。ネグレクトは、愛着障害を起こすリスクが跳ね上がる。愛着障害は、ネガティブな感情を言語化する「感情の社会化」の経験がとても少ないことで起きる。この経験は、ネガティブな感情を受けとめてくれる他者が必要になる。この役割を母親などの家族が担うことが多いのだが、感情の社会化が不足すると感情の制御ができなくなる。簡単に言うと愚痴を優しく聴いてくれる存在があるかどうかである。

表出される行動としては、人に頼る努力ができない・人に興味を示さず交流しない・すぐ落ち込むなどの“反応性愛着障害”と無差別に人に甘える・なれなれしい・試し行動が多い・わがままで虚言が多いなどの“脱抑制型愛着障害”の２つがある。

「何が正しいかではなく、何が使えるか」という発想で、子どものリソース（資源）を探すのが『子ども理解』であるが、前者を自立性が高い、後者を関わるスキルが高いと捉えてうまく関わっていくなどの工夫を学校現場ではしている。

「愛着障害」については、幼児期や児童期の子ども達に関わる仕事に就くのであれば、理論知として身につけなければいけない項目である。また、愛着障害のある子どもは、２次障害・３次障害として「パーソナリティ障害」に発展することはよくあることである。「悲劇は無知から始まる」「知らないことは罪である」という言葉がある。人と関わることを仕事とするヒューマンコミュニケーターは、理論知として、是非、この用語も覚えておきたい。

不適切行動の多い幼児・児童についての指導支援は、『家族療法』が効果的である。『家族療法』とは、家族のシステムがうまく機能していないので、このシステムを修正する、不適応を起こしている人は、それを教えてくれる役割をこなしている。などと考えて、何をどのように修正するかを提案していくものである。ここでは、その内容や方法についての詳細は省く。[1)] 家族のシステムが崩壊している状況を「機能不全家族」と呼ぶが、機能不全が強い状態の家族では、親が“パーソナリティ障害“の状況に陥っている場合が少なくない。

２．　アタッチメント（愛着）とは、特定の相手（母親）との情緒的絆

２－１ スピッツ（Spitz）のホスピタリズム研究

アタッチメント（愛着）とは、「特定の他者と情緒的絆を持つこと」であり、スピッツが、２０世紀初頭に行った「ホスピタリズム（施設症）」の研究が出発点である。施設入所児は、栄養面での問題はなかったが、死亡率が高く発達上の諸問題があったと報告がある。[2)]

２－２ ボウルビィ（Bowlby）のアタッチメント理論

ボウルビィは、第２次世界大戦後の孤児のホスピタリズム研究を行った。ホスピタリズムの原因を「母性的養育の剥奪（マターナル・ディプリベーション）」とした。適切な養育・発達のためのアタッチメント概念を提唱し、「母性的養育の重要性」を唱えた。

【 ボウルビィのアタッチメント４段階 】

第１段階：人物の識別を伴わない定位と発信【出生直後から生後８週～１２週頃】
・定位とは、注視・後追いなど行動、発信とは、泣く・微笑・発声等行動
第２段階：１人または数人の特定対象に対する定位と発信【生後１２週から６か月頃】
・日常よく関わる人に対しアタッチメント行動を向け始める
第３段階：移動能力獲得により対象への能動的接近【生後６か月から２～３歳】
・人物特定が可能となり、見慣れた人がアタッチメントの対象となる。
・養育者を安全基地にして探索行動を行う。
第４段階：目標修正的な協調性形成【３歳以後の時期】
・養育者の行動を予測し、自身の行動や目標が修正可能となる。
・この時期にアタッチメント対象が内在化され、アタッチメント行動が減少する。

２－３ ハーロウ（Harlow）の代理母実験

ハーロウの「代理母実験」が、ボールビィのアタッチメント理論の生物学的根拠となった。

生物学的な充足では不十分、スキンシップがアタッチメント形成に重要と実証した。

２－４ 内的作業モデル

アタッチメント対象との経験により、「安心感や愛護感」を得られる確信が内化していく。他者との安定した関係を持つことのできる基礎となる。

２－５ 安全基地

アタッチメントが成立し始めると、養育者を基地にして、外部へ「探索行動」を始める。安全基地があることで、外部へと探索を開始することは、知的な発達と強い関係がある。

２－６ メアリー・エインズワース（Ainsworth）のストレンジ・シチュエーション法

危機状態に陥った時のアタッチメントの賦活に注目し、それは、エインズワースによる「アタッチメント（愛着）の個人差を測る方法」に結びついた。

概略　1　1歳児と母親のやり取りをマジックミラー越しに観察する。
　　2　母子の分離と再会での様子を観察する。
　　3　参加者は、「母親」「子ども」「ストレンジャー（子どもにとって未知の人）」
手順　1．母親と子どもが実験室に入る。
　　2．母親が着席し、子どもはおもちゃで遊ぶなど自由に過ごす。
　　3．ストレンジャーが部屋に入り、着席する。
　　4．母親のみが退席する。ストレンジャーが子どもに近づき働きかける。
　　5．母親が入室し、ストレンジャーが退席する。母親が話しかけ遊びに誘う。
　　6．母親が退席する。
　　7．ストレンジャーが入室し、子どもに働きかける。
　　8．母親が入室し、子どもに働きかける。ストレンジャーが退席する。

Aタイプ（回避型）

母親と離れても泣いたり混乱がない。母親との再会時は、目をそらすなど避けようとする。また、母親の存在がないかのように自由にふるまう。母親は、子どもからの働きかけに拒否的にふるまうことが多い。子どもに対して微笑んだり身体接触をしたりすることも少ない。子どもが苦痛を示したときに子どもを遠ざけることもある。

Bタイプ（安定型）

母親と離れる時に多少泣いたり混乱するものの、戻ってくると抱き着いたりすぐに気持ちを落ち着けることができる。母親を安全基地として、積極的に遊ぶことができる。母親は、子どもの欲求などに敏感で、無理な働きかけをすることが少ない。子どもとのやり取りも平和的で遊びや身体接触を楽しむ様子が見られる。

Cタイプ（両価値・抗議型）

母親と離れるときに強い不安や混乱が見られる。母親が戻ってきても、怒りながら母親を叩くなどネガティブな感情の切り替えがなかなかできない。母親を安全基地として自由に遊ぶことが苦手で、常に母親のそばに居ようとする傾向がある。母親は、子どもとの関わりはあるが、子どもの欲求に応じたというよりも母親の都合に合わせたものが多い。子どもからの働きかけに対する反応がずれることが多い。

Dタイプ（無秩序・無方向型）

戻ってきた母親に対して顔を背向けながら近づいたり、母親にしがみついた直後に床に倒れこんだりといった、本来なら両立しにくい行動を同時に取る。虚ろな表情のままじっと動かなくなったり、何をしたいのか読めないタイプ。母親に怯える様子を見せたり、ストレンジャーに親しげにすることもある。母親は、抑うつ傾向が高く精神的に不安で、子どもへの虐待が見られることが多い。ストレスに対してきわめて脆弱で、情動的に引きこもりやすいタイプである。

《 愛着の個人差を測る方法 ：１歳児と母親の２回のやり取り、第３者の介入 》

～ ストレンジ・シチュエーションン（SSP）：子どもが養育者へ示す４つの行動 ～

A タイプ（回避型）：養育者との再会によそよそしい（離れるときに泣かず混乱がない）

母親：ネグレクト型…子どもの働きかけに拒否的、微笑みや身体接触少ない。

B タイプ（安定型）：養育者との再会ですぐに安定（離れるときには泣く）

母親：愛着良好型…平和的で遊びや身体接触を楽しむ、欲求に敏感で無理な働きかけもない

C タイプ（抗議型）：養育者と再開後、不安定で怒りを出す（離れるときに泣く）

母親：過干渉型…関わりがあるが自分の都合優先、子どもの働きかけの反応がずれている

D タイプ（無秩序型）：養育者に接近と回避の関わりが同時に見られる

母親：精神疾患型…抑うつ傾向が高く虐待あり

３－１ Ａ群　他人と打ち解けない【社会生活の困難さにかなり大きな個人差がある】

A-1 妄想性 ： 人を信じない。周囲の人の言葉を常に自分に悪意があると捉える。

A-2 統合失調型 ： 親しい関係を気づくことが苦手。発想、行動パターンが人と異なる。

A-3 シゾイド ： 人との接触を避ける。感情の幅が狭く、自分の世界に引きこもる傾向。

３－２ Ｂ群　ドラマの主人公のように目立つ【自分本位】

B-1 演技性 ： 主人公を願い、虚言、身体的症状、虚栄、経歴詐欺などでアピールする。

B-2 反社会性 ：１８歳以上は、「行為障害」と呼ばれ発達障害の一種に分類される。

B-3 境界性 :「見捨てられ不安」、「分裂（良い自分と悪い自分)」「対人操作」が見られる。

B-4 自己愛性 ： 自尊心が強く注意されると怒る。自分の事ばかり考えて周囲ともめる。

３－３ Ｃ群　いつも人に頼る、自分で決められない【日本人に多い】

C-1 回避性 ： 実行する前に諦める。困難を避けて自分を守る。親の過干渉が大きい。

C-2 依存性 ： 自分で答えを出せない。相手が間違えていると思っても口に出せない。

C-3 強迫性 ： 自分のルールにこだわる。型どおり。完璧主義。

４．よく見られるパーソナリティ障害

４－１ 境界性パーソナリティ障害

見捨てられ不安が強く、「落ち込み」「陽気」が両極端で表出する。見捨てられ不安から起こる 7 つの感情（感情のにわか雨状態：「激しい怒り」「抑うつ」「自暴自棄」「寄る辺のない不安」「絶望感」「孤独感」「むなしさ」）が脈略を持たず突発的に姿を現す。行動化として「破壊行為」「依存行為」をよく行う。「良い自分」と「悪い自分」が同居し、相手の評価も少しのきっかけで劇的に変わる。「よい自分」を守るために悪口を陰で言って、周り

を自分の味方と敵に分ける「分離（スプリット)」をよくする。良好な関係と最悪の関係の２つのパターンを作って、それらを衝突させることで周囲の人間関係を壊そうとする。これは、自分の中の混沌とした状態を周りへ投影させた行動だと言われている。

４－２ 自己愛性パーソナリティ障害

愛が自分に留まっている。愛の対象が他人に向かず、自己に溜まり自分が他人より優越していることを確認したがる。他人が自分をどう見ているのかをとても気にする（他者評価への過敏性)。自慢話が多くて、自分のミスを認めない。コツコツとした努力を好まず、一足飛びの成功を求める。理想の自分が崩れることを極端に恐れる（落ち込みか弱者への怒りで発散)。他人より優れた自分と全くダメな自分の二つのモードを行き来する二重構造である。『激しい怒り』『暴力』などの原因の分からない行動化が見られる。自分の思いどおりにならない時に怒りが出る。「周囲が自分を理解しない」という他責的なうつ（うつ病の治療では治らない）が出ることもある。

自己愛パーソナリティの４つのタイプ

「妄想型」…自分が一番、他人へは批判的・懐疑的、現実直視をしない、自慢話が大好き。
「男根型」…活発的で精力的にアピール、他人をバカにする、傲慢で打ち解けにくい。
「渇望型」…他人は自分を支える存在、賞賛・支持を過剰に求める、敵味方を明確にする。
「操作型」…都合の悪いことを無視、いいように捻じ曲げる、虚言・事実を大きく言う。

４－３　パーソナリティ障害への対応

４－３－１ 境界性パーソナリティ障害（BPD）への対応

一定の距離を取る。詰問である「どうして、なぜ」、押し付けである「こうしたほうがいい」は NG である。甘やかし（本人の肩代わりや無理な犠牲を払う）をしないで、「課題の分離」をする。ポジティブな視点で、中間の受け止め方を増やしていく。二分法（全か無か、０か 100 か、善か悪か）の思考に「まぁいいか」を入れていく。ダメ出しではなく、ヨイ出し（例外探し）をしていく。リフレームをして使い方次第で良いものになることを伝える。

４－３－２ 自己愛性パーソナリティ障害への対応

相手の偉大さを映し出す賞賛の「鏡」になる。信頼関係ができたら、本人が優れていると思っていることに価値を付け加える（暗示)。弱さを吐露してきたら、受容しながら自己開示に価値づけをする。無理な要求には、想いを認めながら丁重に断る。

４－４ 反抗挑戦性障害と行為障害

反抗挑戦性障害（反抗挑発症）は、拒絶的、反抗的、挑戦的な行動が６ヶ月以上継続する場合に当てはまる。更に、行為障害は、下記の診断基準の行動の３つ以上が１２か月の間に存在し、１つは過去６か月の間に存在する場合に当てはまる。

1．（しばしば）他人をいじめ、脅迫し、威嚇する
2．（しばしば）取っ組み合いの喧嘩を始める
3．他人に重大な身体的危害を与えるような武器を使用する
4．人や動物に対して身体的に残酷である
5．被害者に面と受かって行う盗みをしたことがある（ひったくりなど）
6．性行為を強いたことがある
7．重大な被害を与えるために故意に放火したことがある
8．故意に他人の所有物を破壊したことがある
9．他人の住居や車に侵入したことがある
１０．他人をだましたことがある

４－４－１ 反抗挑戦性障害（反抗挑発症）

反抗挑戦性障害（反抗挑発症）の男女比は、男子の方が多いが思春期以降は男女差がなくなる（男子は行為障害に移行するのも要因)。病因としては、「気質」や「養育環境」など多数とされ、気質は「自己主張が強い」「好き嫌いが激しい」「感情の振れが大きい」があげられる。環境要因としては、「一方の親に反社会的な症状がある」「母親のうつ病」「親の気分障害」があり、反抗挑戦性障害と診断された多くは、数年後に行為障害へ移行する。

行為障害の有症率（米国）は、18 才以下（男）６～１６％（女）２～９％である。病因としては、親の障害や養育に対する無関心と虐待、頻回な夫婦喧嘩など多数あり、親の障害は主に「反社会性人格障害」「アルコール関連障害」などの物質乱用と関連した障害が多い。一貫性の乏しい暴力的な躾を受けてきた子どもは、「感情の社会化」ができず攻撃的になりやすい。社会的・経済的に恵まれていない生育環境や反社会的なモデリングを提供される生育環境で発症しやすい。しかし、養育に問題のない両親の元でも発症する事例は少なくない。経過として、加齢と共に診断基準に当てはまる項目が増加していく傾向がある。

ADHD と反抗挑戦性障害及び行為障害との関連性として、多くの場合、ADHD の症状の内の多動性は加齢に伴って減衰してくるが、不注意や衝動性はあまり変化しないことが多く、多動性が減衰しADHDの診断基準に該当しなくなる。これと入れ替わるように、もしくはADHDの診断と同時に、反抗挑戦性障害や行為障害と診断される例が増加する。反抗挑戦性障害は一般に行為障害に先行して発現することが多い。ADHD の症状の減衰と入れ替わるように発現する場合の行為障害は、発症年齢が比較的高く二次的傷害の要因が大きいので、一般に予後が不良とされている行為障害の中では適切な対処によって改善する可能性が高い。

４－４－２ 反抗挑戦性障害と反抗期の違い

通常子どもの健康な育成に反抗期は必要なものとされている。反抗期には誰でも親に反抗的な態度をとったり、イライラしたりするものである。そのため反抗期と反抗挑戦性障害を見きわめることは難しい場合がある。見分けるためには反抗的な行動がどのくらい続いているのか、どのくらいの頻度で発症するのかを考えることが重要になる。

例えば第 1 次反抗期にあたる５歳未満の子どもの場合、周囲の人に対して怒る、乱暴な言葉を用いて反抗する、かんしゃくを起こすなどの行為が 1 週間に 1 回、少なくとも半年間続くことが、見分ける条件となっている。しかし反抗挑戦性障害か見分けるためには、これらの条件だけではなく発達水準、性別、文化の基準などさまざまな条件を考慮する必要がある。これらすべての条件をふまえた上で発症頻度・症状の重さが通常の反抗期を超えている場合は、反抗挑戦性障害と診断される。

５　おわりに

教育現場では、不登校が３０万人を超えて社会問題となっている。釧路市内だけでも２００人を超える勢いであり、特別支援学級における情緒での課題を抱える子どもが、感情制御ができずに暴徒化している事例が増えている。これは、ゲームによる影響が大きいと考える。長時間のゲーム・ユーチューブなどの視聴をすることは、前頭葉の血流活動が停止状態になるという警告が脳科学者から出されている。前頭葉の活動性が下がると、共感性の欠如につながる。共感性が下がるということは、相手の気持ちを推し量れないことである。つまり、相手が自分をどう見ているのかを想像できなくなるということである。社会性で最も大事なメタ認知（客観的に自分を見る力）が育たないのである。自閉症の子は、共感脳（他人への興味関心）が活動しにくく、相手が自分をどう見ているかという想像が働かない。だからメタ認知も育たない。空気が読めないのは当然である。自閉症ではなくても、心身の発達が正常の発達曲線で進まずに歪みが生じて、自閉症的な行動をする子どもが増えていると思われる。釧路管内を見渡すと、高学年でも母親が同伴しないと教室に入れない子どもや友人を自分から誘えない子どもが増えている。自分から誘えない子は、SOS を出せない子どもたちでもある。釧路で実施されている「Q-U テスト（集団の発達段階や個人の認知を調べるバッテリー調査)」でも、「配慮のスキル」は高いが「関わりのスキル」が低い結果が明確に出ている。「緊張不安」「友人の関係性が分からない」「学級で貢献できていない」を訴える中学生が増加している。学力が高い生徒の不登校は、「配慮のスキル」が欠けていることが多いのも特徴の一つである。健康的な心身の発達を望むなら、関わり方のスキルトレーニングを訓練しないといけない時代に突入した。心身の発達を意図的に計画に学びあう環境が必要になってきたのである。愛着障害やパーソナリティ障害へのリスクを防ぐためには、感情の交流を短時間でいいので頻度を増やしていくことが幼少期から求められる。また、福祉との連携を強化することで保護者の孤立化を防ぐことをしていかないといけないだろう。

《 参考文献 》

1）1．ジョン・ボウルビィ、庄司順一（1993)『母と子のアタッチメント　心の安全基地』医療薬出版

2．日本家族研究会家族療法学会（2013)『家族療法テキストブック』 金剛出版

2）公認心理師対策研究会（2019)『公認心理師要点ブック』翔泳社

3）穂谷竹俊（2011)『パーソナリティ障害を乗り越える正しい理解と最新知識』日東書院

岡田尊司（2010)『ササっとわかるパーソナリティ障害』 講談社

岡田尊司（2012)『ササっとわかる境界性パーソナリティ障害』 講談社

事業報告　釧路市輝くまちづくり交付金採択事業を継続して

「幼い子どもたちのためのコンサートひろば」の実践②

—「0 歳からのフアミリーコンサート」の試み～豊かな感性の育ちを求めて —

進藤信子
（釧路短期大学幼児教育学科）

１．　はじめに～課題への取り組みについて

令和６年４月１日から子ども家庭庁では「地域子育て支援拠点事業実施要綱」を定め、適用することで通知されている。その中で、地域の子育て支援に指針を示した。それは、少子化や核家族化の進行、地域社会の変化など、こどもや子育てをめぐる環境が大きく変化する中で、家庭や地域における子育て機能の低下や子育て中の親の孤独感や不安感の増大等に対応するため、地域において子育て親子の交流等を促進する子育て支援拠点の設置を推進することにより、地域の子育て支援機能の充実を図り、子育ての不安感等を緩和し、こどもの健やかな育ちを支援すると示した。

近年、国の政策でも子育て支援対策が、少子化の中進み、そのためにも、若い人たちへの支援事業の一部として、こどもの情操教育には、生活の中で触れる音を始め、脳の成長にも大きな影響があることは実証されていることから[1)]、その環境を整えていくこととして取り上げられていることにもなっていると思われる。

ところで、近年続いているコロナ禍で、乳幼児の生育環境が狭くなり、情報の多くはテレビやインターネット情報に頼らざるを得ない状況が続いていた。

また、その後も、ユーチューブでの音楽配信は当たり前のように生活の中で楽しみの一つとして利用されているようだ。

子どもたちの取り巻く環境も変わりつつあり、足場になる土台も増えているようだ。

しかし、「緊急避難基地」である家庭の土台は何にもましてこれから大切になると思われ、その環境をますます整えた形にするためにも筆者はコンサートを継続することに意義を大きく感じている。

２．「幼い子どもたちのためのフアミリーコンサート」開催の実際について

私は地域社会の連携から家庭と保育者の連携を構築したいと思ってきて、継続してきた。

釧路市が街の活性化に向けた大きな取り組みである「輝くまちづくり交付金」は、市民と行政が協働、連携して公益的な事業を実施することで、地域やまちの課題を共有し、課題解決を通じて地域の活性化を図ることを目的としている。また、まちづくりの精神を次世代に引き継いでいくため、釧路市がより輝くよう、市が設定する課題テーマに沿って、市民から市と協働して取り組む形で提案事業を支援する制度を設けている。提案事業が採択される

と、釧路市との連携が可能になる。

毎年、この事業には多くの団体が応募し、防災・町の活性化などのテーマは多くのアイディアとして提案されている。

そこで、私は、釧路の「まち」との連携・協働を考え、2023・2024 年度の「若い世代を社会全体で支える基本構想」の分野に応募することにした。

これは、人口減少社会に立ち向かうため、若い世代が結婚し、子どもを健全に育てられる環境の整備に寄与する提案で、条件は以下のようなものである。

（1） 市が設定した課題テーマであること。

（2） 多くの市民参加が見込まれる公益的・公共的な内容で、過去の釧路市の類似補助金等による事業を含めて新たな取組であること。

（3） 地域課題の解決や地域の活性化につながる事業であること。

（4） 具体的な成果目標があり、釧路市に広く波及効果が見込まれる事業であること。

（5） ソフト系事業であること。

（6） 新型コロナウイルス感染症拡大防止策を十分に講じていること。

ただし、次のいずれかに該当する事業は対象外。

① 釧路市からの他の補助金等を受けている（申請している）事業。

② 定例の講演会やイベント、祭り等の年中行事。

③ 当該団体の経常的な運営維持管理に属すると認められる事業。

④ 事業効果が当該団体や特定の個人のみに帰属する事業。

⑤ その目的が主に物品販売である事業。

⑥ 公序良俗に反するもの。

⑦ 宗教上の教義を広め、儀式行事を行い、信者を教化育成することを目的とするもの。

そこで私は目的を考えてみた。

筆者が、ここ数年にわたって取り組んできた研究課題、「保育者を目指す学生の大きな学びの機会」と、「これから育っていく幼い子どもたちの情操教育の場」、また様々な人や団体との多様な交流を通して、心豊かなこどもの育ちを以下のように考え、目的とした。

① 情操教育＝子どもたちの感動体験創出

② 連携（子どもたち・子育てに関わる人や団体との多様な交流）

③ 子育て家庭と子どもたちの感動の情報発信

コンサートには、プロとして活躍している演奏家を始め、地元の子どもたちによる「釧路少年少女合唱団」・釧路短期大学の音楽ゼミナールなどの学生たちがステージを作り、その年は初めて釧路市生涯学習センター大ホールの会場にした。(2022 年) [2)]

その後 2023 年には、さらに賛同する多くの市民の提案で「バレエのステージ」、また絵本に音楽をつけて「スクリーンミュージックシアター」などが加わって一層にぎやかで楽しいステージとなった。継続しているおかげで前年の振り返りのもとに、会場の音響、照明にも工夫をし、子育て支援を学ぶ学生たちは、参加の子どもたちへ見守りや、サポートなどを担

うことになった。[3)]

幼い子どもたちやその保護者が、一つの企画の中で、良い音楽に触れる機会として、また、多世代・障害者などとの交流から、多くの体験を得て子育てに希望や勇気を得ること。さらには、手づくりで様々な子どもたちへの作品を提供する母親たちのグループとのつながりを持つことで子育てに夢を描くことが出来るように心掛けた。その結果、プレゼンテーション審査を経て、採択された。

当日の内容について 2023 年 12 月 23 日「0 歳からのファミリーコンサート」

プログラム	内容
オープニング	クリスマスメドレー
バレエ「くるみ割り人形」より	行進曲・金平糖の踊り・あし笛の踊り
絵本ミュージックシアター（朗読のための器楽曲）	「きらぼしちゃんと森のクリスマス」
合唱とトーンチャイム	ミッキーマウスマーチ・おめでとうクリスマス・ジングルベル スタジオジブリメドレー（散歩・カントリーロード・テルーの歌ポニョ・風になる）
みんなで演奏	あわてんぼうのサンタクロース

出演者はピアノ（佐藤佐知子）・オーボエ（畠山香里）・フアゴット（高井享佑）・ハープ（佐野理恵子）・ホルン（白井有琳）・歌（泉かおり）。すべてが釧路出身でプロとして活躍いている。それぞれが、釧路東京など離れていて打ち合わせが難しい中、ズーム会議を中心に、何度も打ち合わせや検討を重ね、前日に一度のリハーサルでまとめている。

2024 年オープニング（左）

みんなで演奏の「あわてんぼうのサンタクロース」（右）

当日の出演者全員と、会場のすべての来場者との大合唱

ロビーでのひろば 2024

2023 年よりも広場で楽しむ時間に工夫したおかげで大盛況

2023 年（りんごマアチ・ピヨタン・釧路聴力障碍者協会「手と手」・就労支援事業所「すまいる 946」・「釧路パンや」・ドリンクカフエ「かりん堂」釧路愛育協会「ひかり自立支援センター」「こぱんるーな」が出店。2024 年はさらに「すてっぷ」「などのほかに、子育て世代の生活応援イオンマイホームセンター」「フオトブース」も加わっていただき、それぞれがにぎやかに交流することができた。

2024 年 12 月 21 日「0 歳からのファミリーコンサート」

プログラム	内容
オープニング	クリスマスメドレー
絵本ミュージックシアター（朗読のための器楽曲）	「いろいろクリスマスツリー」（おおでゆかこ作）
トーンチャイムの演奏	星に願いを・ヒイラギ飾ろう・ジングルベル
合唱	サンタが街にやってくる・ミッキーマウスマーチ・小さな世界・アホールニューワールド
ダンス	赤鼻のトナカイ
みんなで演奏	あわてんぼうのサンタクロース

2023・2024 年の企画はこれまでのホールから、様々な人の交流を目指して、「釧路市生涯学習センター」大ホールを会場にした（2018 年・2019 年北海道立釧路芸術館アートホール（200 人収容）、2020 年・2021 年はフイッシャーマンズワーフ MOO の植物園（100 人収容））。釧路市からの交付金も採択されて、規模を拡大することもできた。2023 年・2024

年についての来場者の聞き取りで意見をまとめてみた。

⁂多くの市民に支持されている。
⁂クリスマスに染まって楽しんだ。
⁂子供たち、親たちが子どもの傍でいい顔をして楽しんでいた。
⁂コンサートを求める人たちが大勢いて釧路は良い街だと感じた。
⁂広場の盛り上がりは昨年以上。
⁂従事した人たちのぬくもりを感じた。
⁂「元気のない街」が力を引き出され可視化できた。
⁂家族で楽しい充実した時間の共有と・本格的なコンサートに触れることができた。
⁂親子で音楽を楽しむことで、子どもの情操教育ばかりか大人の癒しとなった。
⁂毎年楽しみにしている。
⁂駐車場が不足して、父親は送迎だけになった。
⁂広場の開催時間を見直して、コンサートの前、終わった後にもひろばの利用をゆっくり楽しむことができた。

子どもの良質な成育環境を保障し子ども・子育て家庭を社会全体で支援することを目標として開催したが、昨年以上の来場者（親子６５０人で予想以上に広がりのある市民の参加を得ることができた。３世代の参加（祖父母・親・孫）・東京からコンサートを楽しみに帰省した人もいた。

2023 年ひろば（左）

表２　コンサートを楽しめましたか

	回答数(%)
楽しかった	88(95.7)
少し楽しかった	4(4.3)
楽しくなかった	0(0)

表３　前回からの改善事項

・子どもたちも、一緒に歌い、家族で手拍子など楽しんでいたようだった。
・ミュージックシアターは楽しい取り組みだったが、スクリーンに投影する映像が生涯学習センターホールで改善できた。
・報道機関がたくさん取材などを申し出てくれた。
・障害者就労施設・ハンドメイドショップが規模的には制限のある中でも、設営できた
・前回までは、ホールの照明も制限があったが、今回は、音響照明に工夫できた。

・０歳からも OK というコンセプトは小さい子どものいる家庭に素敵なこと（複数の記述）
・ピアノ・チェロ・オーボエの音色が素晴らしかった。声楽もよかった。
・子どもと行けてよかった。子どもがぐずっても退場してよいということはありがたい。
・今後、何らかの形で、地域に子どもが本物に触れることのできる催しとして定着できるとよい。
・とても楽しかった。最後のあわてんぼうのサンタクロースも楽しそうだった。
・ぜひ機会を増やしてほしい。
・２歳の子どもも引き込まれ、踊りながら楽しみました。
・合唱・生演奏は母も癒された。
・耳にやさしい音楽でよかった。
・老若男女が参加できてよかった。
・お父さんが小さいお子さんを抱っこしている姿がたくさんあって、ほほえましい。
・障害者にとっては、声も出すことがあるが、会場の空気に楽しい時間になった。

表４　今後聞いてみたい曲・楽器

楽器：トランペット・バイオリン・フルート・いろいろな音色の楽器・木琴・オーボエ（音色が良かった複数）・金管楽器・いろいろな楽器
曲目：トランペット吹きの休日・クシコスポスト・クラシックの曲・クラシックを生で聞かせたい
・定期的に開いてほしい
・人形劇・みんなで歌える曲
・小学校教材

２．まとめと今後

一般的には、コンサートなどは、未就学の子どもの入場が制限されていて、なかなか、本物の音楽に触れる機会が少ない。しかし全国的に、未就学対象のファミリーコンサート・0歳からの子どもも入場できるコンサートなどが年々増加している。[4)]

例えば5月のゴールデンウィークには東京で「ラフォルジュネ」「ソニー音楽財団による子ども音楽フエスティバル」など　また、札幌でも「ゴールデンウィークの音楽祭～キタラアラカルト」など各都市でも企画され、大人はもちろん、0歳からの子どもも入場できるコンサートが増えている。[5)]

筆者は家族で楽しい充実した時間の共有と本格的なコンサートに触れて、子どもたちの情操教育に役立つこと。また子どもの良質な成育環境を保障し、子ども・子育て家庭を社会全体で支援することを目標として開催を継続してきたが、予想以上に広がりのある市民の参加を得ることができたと考えている。

そのうえ、毎年、趣旨に賛同してくれる協賛団体や、新規に協力を申し出てくれるところも増えているが、毎年の恒例行事として当日の参加の市民も増えている。

大きなホールで開催することは広報活動が大切であるが、この取り組みに賛同する報道機関が、事前告知などいろいろ尽力してくれたこと、さらに子ども育成課の連携も、大きな力となっている。

ホールの駐車場など不便なことも否めない状況がある中、0 歳からお年寄りまで 500 人以上（2024 年は 600 人の家族）の多くの参加を得ることができた。

① 3世代また、親子で音楽を楽しむことで、子どもの情操教育ばかりか大人の癒しとなった様子を感じることができ、終了後の新聞報道からも状況を感じることができた。

② コンサートひろばを形作っている協力団体及び協力するスタッフとの交流から、音楽だけにとどまらない互いの支え合いの場ができた。これには、釧路市障がい福祉課の協力が大きく貢献していて、準備から運営など、また終了後の振り返りを次に生かせるような意見も提案くださり、釧路市との連携が大きなエネルギーとなっている。

③ その後の活動につながることを視野に入れたが、協力学生が積極的で、子どもたちの世話や、協力団体への支えあいも予想以上にすることができた。

④ コンサートを通して、子ども・子育て家庭・子育てを支援する人・地域で暮らす様々な人が、気軽に和やかに交わる機会ができた。

子どもたちが地域の中で遊びの場が減少している中、音楽など情操体験をたくさんの人と分かち合うことが減少する中、環境・人的資源を真剣に考え、人とのつながりの中から今の時代に合った、子どもたちの情操教育を見直して行くことが大切であろう。

注

1） 川島隆太（2015）『ホットケーキで「脳力」が上がる』小学館, p.112.

2） 進藤信子・田中英里（2020）「未就学の子どもたちのためのファミリーコンサートの実

践：豊かな感性の育ちを求めて」『釧路短期大学幼児教育学科実践報告』第 3 号.

3) 進藤信子（2022）「未就学の子どもたちのためのファミリーコンサートの実践：豊かな感性の育ちを求めて」『釧路短期大学幼児教育学科実践報告』第 5 号.

4）12 年前から継続している、千葉県浦安市の「公益財団法人うらやす財団」による 0 歳から入場可能な「ピュアホワイトクリスマスコンサート」は毎年大変人気で、全国的にこのような取り組みも増えてきている。北海道では、札幌キタラ　コンサートホールでも、最近は「0 歳からのコンサート」を企画して親子でコンサートを楽しむイベントが開催されている。

5）1995 年（平成 7 年）よりフランスのナントで開催されているラ・フォル・ジュルネの日本版で、2005 年（平成 17 年）に開始された。フランス同様、演奏家の選出や演奏会の選曲はルネ・マルタン（フランス語版）によって行なわれている。「一流の演奏を低料金で提供し、明日のクラシック音楽の新しい聴衆を開拓する」という基本理念のもとに、選曲はクラシック初心者から上級者まで楽しめるように配慮されている。また年齢による入場制限せず幼児や子供が入場できる公演もあり、家族でクラシック音楽を楽しむことができる。

KJC ランドチーム保育の試み

―１・２年生連携の視点から―

篠木　真紀

（釧路短期大学幼児教育学科）

１．KJCランドの経緯

「KJC ランド～子どもの遊びの日」とは、「釧路短期大学」の英語表記「Kushiro Junior College」の頭文字から付けられた名称で、釧路短期大学を会場に子どもたちが楽しく遊べる一日をつくることを目的として 2014 年度より開始された。開催当初の 4 年間は、釧路短期大学 A 校舎を会場に地域教育研究ゼミによる運営を基に、幼児教育学科の学生が、１・２年生別にグループに分かれ、舞台や工作コーナー、木のおもちゃで遊ぶコーナーや絵本・児童図書の取り替え企画などが行われた。地域教育研究ゼミ以外の学生は、自分の出番の時だけ参加する形であった。2018 年ゼミ担当教員の転勤に伴い、KJC ランドはゼミ運営からグループから選出される運営委員会による運営に移行し、以来幼児教育学科の学生全員がイベントの最初から最後まで全員参加する形式をとっている。[1)2)]

開催時期は2019 年度の第６回までは１月に開催されていたが、この時期は１・２年生とも後期試験が近く、1 年生に至っては保育所実習前で学生負担が大きいと判断され、翌 2020 年度は授業が全て終了する 2 月第 2 週に移行した。また参加者は地域の幼児やその家族で自由参加の形で実施されていた。2020 年度も当初は同じ形で計画準備されていたが、世界的な新型コロナウィルス感染拡大により、少人数の事前申し込み制による zoom での遠隔イベントに変更された。

2021 年、2022 年は新型コロナウィルス感染拡大の懸念から、幼児教育学科の１・２年生を５～６グループに分け、各グループが近くの幼稚園や保育園、認定こども園に出向いてイベントを開催することで、他園の園児達が一ヶ所に集まらない形で KJC ランドを運営した。また日程も幼・保・認定こども園の行事や、幼児教育学科の実習系科目全体のカリキュラムなどを鑑み、12 月の開催に変えた。[3)]

2023 年 5 月から新型コロナウィルス感染症が５類感染症に移行したことを受け、4 年ぶりに大学での一般自由参加が再開され、2024 年度もその形が継続している。

回数	開催年度	開催日	運営形態	参加者
1	2014	2015.1.18(日)	地域教育研究ゼミが運営	自由参加
2	2015	2016.1.17(日)	地域教育研究ゼミが運営	自由参加
3	2016	2017.1.22(日)	地域教育研究ゼミが運営	自由参加
4	2017	2018.1.21(日)	地域教育研究ゼミが運営	自由参加
5	2018	2019.1.20(日)	教員と運営委員会主体で運営	自由参加
6	2019	2020.1.18(土)	教員と運営委員会主体で運営 １、２年合同グループでの企画開始	自由参加
7	2020	2021.2.11(木) 13(土) 14(日)	対面から遠隔に変更	事前申込
8	2021	2021.12.17(金) 18(土)	協力園で開催、一部一般参加	一般参加は事前申込
9	2022	2022.12.7(水)	協力園のみ	一般参加無し
10	2023	2023.12.16(土)	対面参加が復活	自由参加
11	2024	2024.12.14(土)	対面参加	自由参加

本稿は、一般参加が再開された 2023 年の第 10 回と 2024 年の第 11 回を振り返り、チーム保育、特に１・２年生の連携を視点として考察し、今後の KJC ランドの展望を図るものである。

２．KJC ランドのねらい

「KJC ランド～子どもの遊びの日」のねらいは「地域の子どもたちのために、楽しい遊びを提供する」「学生の学びの成果を活かし、地域文化の向上に資する」ことである。厳冬期の釧路管内では家族で参加できるイベントが喜ばれており、KJC ランドも回を重ねるにつれて参加者が増えてきていた。また幼児教育を毎日学ぶ学生にとって日頃の学修を実践に移す貴重な機会とも言える。2018 年度までは１年生は工作コーナー、２年生は舞台や園児参加型コーナーと分けて運営していたが、2019 年度の第６回から「１・２年生で連携し、子どもと一緒に楽しむ」ねらいが追加され、合同でイベントを企画運営することを始めた。

これは幼児教育学科がこれまで１・２年生の交流がほとんどなかったからである。KJC ランドを通して１・２年生が密に関わることで、学修や大学生活での情報共有や２年生が 1 年生の相談に応じるなどの効果を狙い、1年生と２年生で別のコーナーを設けるのではなく、合同でイベントを作る形になった。１・２年生を５～６グループに均等に分け、実習系の授業を同じ曜日に配置することで交流時間を確保し、１・２年交えて話し合う時間を増やすことでチームとして保育を考える素地を作った。

３．2023 年度と 2024 年度のイベント内容

以下に 2023 年度と 2024 年度のイベントブース内容を提示する。

表１　2023 年度と 2024 年度のイベント内容

2023 年度		2024 年度	
グループ	内容	グループ	内容
A	ガチャガチャ、ボール的当て	A	輪投げ、跳び箱、フラフープ、平均台、ボールプール、新聞紙玉入れ
B	カーリング	B	網くぐり、グルグルバット、長縄、お菓子取り競争
C	的当て、プラ板	C	ボールプール、フラフープ、トンネル、ヨーヨー、お絵かきブース
D	マット、跳び箱、トランポリン、輪投げ、フラフープ	D	ダンボールキャタピラー、トランポリン、コーン、マット
E	お菓子くじ、ヨーヨー釣り	E	的当て、プラ板
F	サーキット運動	F	射的

2023 年度は的当て、平均台、フラフープけんぱ、サーキット運動、トランポリンなどの運動遊びや、手作りガチャガチャ、輪投げ、プラ板作り、ペットボトルキャップのカーリング、ヨーヨー釣り、的当てなどが行われた。2024 年度はダンボールキャタピラー、トランポリン、跳び箱、フラフープ、グルグルバットなどの運動遊びの他、的当てやプラ板作り、お絵描きコーナーなどが企画された。内容は１・２年合同のグループで話し合い決定した。当日の運営もグループそれぞれに任されており、誘導や子どもたちへの関わりなども終始学生が考えて行動し、教員はそれを見守る形で運営された。当日は 2023 年度、2024 年度共に 400 名以上の参加があった。

４．学生の振り返り

（1）KJC ランドの実施時期と内容

2023 年度、2024 年度共、KJC ランドを行った次週の授業の中で、１・２年生合同で振り返りをした。グループ毎に反省点など話し合う時間の他、Google form を用いて個人の振り返りを記述する形をとった。Google form で KJC ランドに参加した学生全員からアンケートをとった。2023 年度は 70 名、2024 年度は 56 名の回答を得た。

2014 年度から 2020 年度まで KJC ランドは 1 月または 2 月に開催されていたが、2021 年度から 12 月開催になった。2023 年度の振り返りで次年度の希望を学生に聞いたところ、「今年度と同時期が良い（85.7%）」、「今年度より前が良い（11.4%）」で 2020 年度までに実施していた１、２月開催希望は 0%であった。内容もコロナ禍での「参加者を複数園に絞った方が良い（4.3%）」「幼稚園や保育園などに出向く内容の方が良い（2.9%）」はわずかであった。2024 年度の振り返りアンケートでは、「今年度と同時期が良い（91.1%）」、「今年度より

前が良い（7.1%）」であり、１月開催希望が１%、２月希望者が０%であったことを鑑みると、11 月の大学祭、１月２月の後期試験などを避けた 12 月が学生にとって負担感が少なく、また余裕を持ってイベントを準備できると考えられる。（図１）

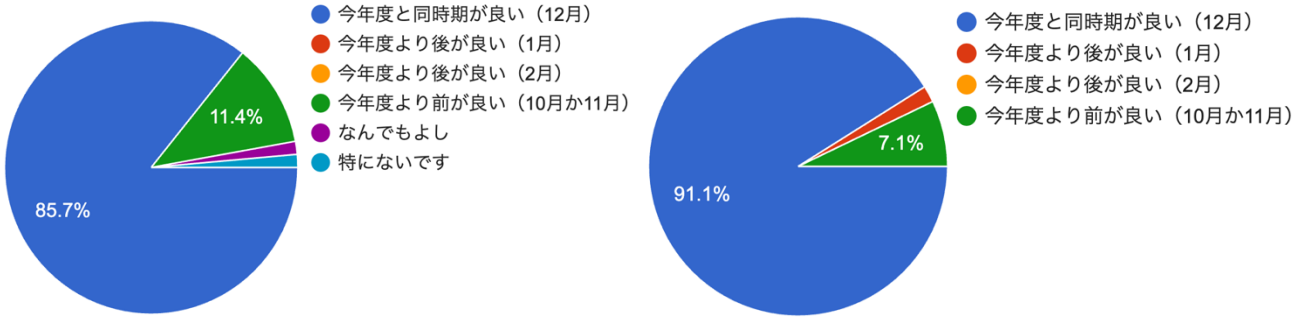

図１　KJC ランドの開催時期について（左：2023 年度　n=70　右：2024 年度　n=56）

イベントの内容については、幼・保・認定こども園に出向くより大学に招待する方が場所を固定して時間をかけて準備ができるという理由から次年度もほとんどの学生が大学での開催を希望した。（図２）

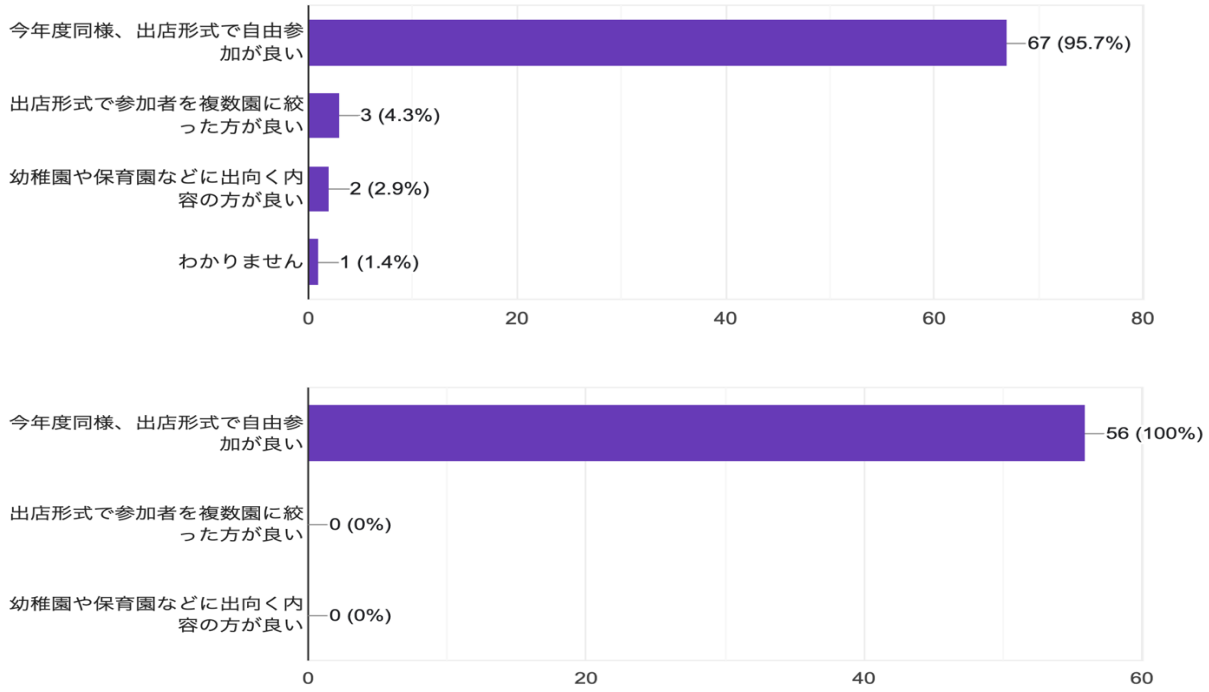

図２　次回の KJC ランドの内容希望について（上段：2023 年度　n=70　下段：2024 年度　n=56）

（２）１・２年生の連携について

１・２年生の連携やチームの活動については、自由記述で以下のような感想が聞かれた。表２では良かったことを、表３では改善点について記す。

表２　１・２年生の連携やチームでの活動についてよかったこと（振り返りフォームより抜粋）

2023 年度
・準備するときに 1 年生と 2 年生がまざって活動できてよかった。 ・全員で同じ作業をするのではなくて、役割分担をして作業を進めることができたので、時間を短縮して準備することが出来ました。 ・しっかり 2 年生が 1 年生を巻き込んで進められたこと、1 年生が 2 年生の意図を汲み取って一生懸命準備

しようと頑張ってくれたことがとてもよかったです。
・普段関わる機会のない1年生と関わることが出来て良かった。
・1年生が初めてのKJCで分からないことだらけなのにも関わらず、積極的に動いて活動してくれたので凄くありがたかった。
・先輩がリードしてくれたり楽しく話ができたりして楽しかったです。
・2年生が去年の経験を元にアドバイスしてくださったのが助かりました。
・先輩がアドバイスをくれることが多く、子どもたちを楽しませるための工夫を色々と学べたことがよかったと思います。

2024年度

・どんな細かいことも、グループLINEという皆が見れるところに更新していくことで、情報の漏れがなかった。
・来年に繋がるよう準備から１・２年混ざって活動出来たので良かったです。
・1年生が空き時間に準備を進めてくれていたことでスムーズに作業することが出来た。
・1年生が積極的にプラ板に絵を描いてくれて、たくさん量も準備できたし、早めに終わることが出来た。自分の役割ではなくても、状況を見て助けてくれてとても良かったです。
・2年生にこうしたらどうですか？などの意見も言いながらできたのでとても活動しやすかった。全員が活動していたのでとても成功できた。
・買い出しや会計、当日の受付に1年生も担当させてもらったおかげでおおよその流れや進め方が把握出来たので来年焦らずスムーズに進めていけるのではないかと思いました。 また2年生が気さくに話してくださったり優しい方ばかりでグループの雰囲気がとても良かったので、自分の意見やアイディアを言い出しやすく、みんなが色々なアイディアを出せたおかげでとてもいいものが作れたのでは無いかと思いました。
・当日、2年生の方々が積極的に声をかけながら進めてくださって、だんだんと私たち1年生も自分から動くことが出来たし、子どもたちと積極的に関わることが出来ました。
・2年生となかなか関わる機会がないので、KJCなどの活動で2年生と一緒に準備できるのも2年生が実際に近くで子どもたちと関わっている場面を見ることが出来るのも良いなと思った。

表３　１・２年生の連携やチームでの活動について改善点（振り返りフォームより抜粋）

2023年度

・準備までの期間でそんなに関わりがなかったので初対面にも等しい状態で若干ギクシャクしてた感じがあったなと思います。KJCのためにその前から1年生2年生の関わる機会がもっとあればいいのかなと思いました。
・1年生が意見を出しにくかったり、2年生だけで進んでいる感じだった。
・あまりコミュニケーションが取れてなくて別々の活動になってる時があった
・話し合う時間が少なくて細かい所は当日何となくの雰囲気で行ってしまったので、もっと話し合う機会があればよかった。
・自分から話しかけることが苦手なのもあるが、先輩ともっと話しやすい雰囲気だったらやりやすかった。
・１・２年に分かれて準備をしていたりブースの担当をしていたので、１・２年混ぜて行うべきでした。

2024年度

・負担が一部の人にかかってしまったところがあった。
・話し合いの時間が短かったので、そこはもう少し行うべきだったと感じた。
・個々での活動が多いと直接での話し合いではなくSNSなどの連絡手段になり意思の疎通が少し個人で異なる。
・2年生が指示を出してそれで1年生が動くというのが多くて、2年生が別の作業をしている時に1年生が立って見ているだけというのがよくあったので、1年生の方からも意見を言ったり、自分から何かをするように行動してほしい。
・2年生が引っ張っていけたことは良かったと思うけど、1年生の意見を引き出したり耳を傾けたりした方が良かったと思った。

１・２年生の連携については、2 年生がリーダーシップをとって指示や役割分担をしたり、1 年生から意見が出て協力しあえたという意見が出た反面、１・２年生間で距離感を感じたり、一部の学生に負担が偏るなどの意見が聞かれた。また情報共有ツールとして SNS を用いたグループが多かったが、細かいところも共有できたという感想がある一方、対面でのやり取りが少なく、共通認識がずれたという意見も聞かれた。

５．今後の KJC ランドへの展望

今回、幼児教育学科学生の振り返りの考察から、１・２年生間の対面コミュニケーションの充実と細かい情報共有、また２年生による温かいリーダーシップと指示で 1 年生が積極的に動けるようになり、チーム保育が効果的に推進されることが示唆された。

KJC ランドは幼児教育学科全員が集まり企画から運営まで携わる唯一の機会である。保育現場に出れば、学芸発表会や運動会など、職員全員が協力して動かなければならない行事がいくつかあり、KJC ランドはその模擬演習的な意味合いも含まれると考える。全員が協力してより良いイベントにしていくためには、同級生はもちろん異学年の交流や共同作業も欠かせない。今回 2023 年度と 2024 年度を１・２年生の連携という視点で振り返ったが、２年生は１年生に明確な指示を出すことと共に 1 年生が意見を出しやすいように配慮すること、１年生は２年生の動きを見ながら準備や当日の子どもたちへの関わり方を学び、積極的に動くことが求められる。SNS などのツールを用い情報共有を図りながらもそれだけで十分と思わず対面での話し合いを心がけることが重要になってくると考えられる。

KJC ランドの取り組みは、2023 年度、2024 年度共に 11 月から約１ヶ月の準備期間を設定している。毎週水曜日は１・２年生とも実習系の科目を当て、合同で作業や話し合いができる時間割になっている。作業が開始されると分業になり情報共有の場面が減少するため、互いに意識して進捗状況を情報共有するなどが必要であろう。

これまでも科目履修登録の時期や実習の報告会などで１・２年生が顔を合わせる機会はあったが、学生の感想からはまだ互いに馴染めていない印象も感じられるため、KJC ランドが始まる前に、さらに交流の機会を設けることも必要かもしれない。学びの集大成である KJC ランドは、学生個々の力を伸ばしながら、異学年を交えたチーム保育力の向上を推進し、地域の子どもたちとその家族に楽しい時間を提供できればと考える。

引用・参考文献

1）穴水ゆかり・篠木真紀・岩野布美子・白川和希 進藤信子・吉川修・井上薫(2019)「2018 年度 KJC ランドの運営を振り返って 第１報 -学生を対象としたアンケート調査結果から-」『釧路短期大学幼児教育学科実践報告』第２号、2019 年 3 月 30 日。http://www.midorigaoka.ac.jp/kushirojc/php/disclosure/index.html より その他報告書＞幼児教育学科実践報告_第２号

2）穴水ゆかり・篠木真紀・岩野布美子・白川和希 進藤信子・吉川修・井上薫(2020)「2019 年度 KJC ランドの運営を振り返って 第 2 報 -来場者を対象としたアンケート調査結果から-」『釧路短期大学幼児教育学科実践報告』第３号、2020 年 3 月 31 日。http://www.midorigaoka.ac.jp/kushirojc/php/disclosure/index.html より その他報告書＞幼児教育学科実践報告_第３号

3）篠木真紀・井上薫・進藤信子・吉川修・穴水ゆかり・白川和希・小林麻如(2022)「2020 年度 KJC ランドの運営を振り返って-コロナ禍における地域貢献のあり方を探る-」『釧路短期大学幼児教育学科実践報告』第４号、2022 年 1 月 17 日。http://www.midorigaoka.ac.jp/kushirojc/php/disclosure/index.html より その他報告書＞幼児教育学科実践報告_第４号

執筆者・研究協力者

小林麻如（釧路短期大学幼児教育学科専任講師）
篠木真紀（釧路短期大学幼児教育学科専任講師）
高畠昌之（釧路市立芦野小学校校長）
進藤信子（釧路短期大学幼児教育学科教授）

釧路短期大学幼児教育学科実践報告
第6号

2025（令和７）年3月26日発行
発行所 学校法人緑ヶ岡学園　釧路短期大学　幼児教育学科
〒085-0814　北海道釧路市緑ヶ岡１丁目10番地42号
℡ 0154-41-0131（代表）